

小 学 校

大会主題「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた体育学習の推進」

研究主題「主体的・対話的に学ぶ子供の育成」

－多様な関わりの中で、わかる・できる楽しさや喜びを求めて－

I 研究の概要

1 主題設定の理由

(1) これまでの研究実践から

本校では、平成7年度に千葉市の研究指定校として体育指導の報告会を行って以来、他教科の研究も併せて行いながら、約25年にわたり体育指導の研究に努めてきた。平成24年度より、「自ら課題を追求し、主体的に学ぶ子供の育成」を研究主題に、これまで研究を進めてきた。「めあて学習」において「運動が“できる”ための授業づくりの工夫」や“かかわるたのしさ”を味わうための授業づくりの工夫」に視点をおき、実践研究を進めてきた結果、自ら場を選択して意欲的に学習する姿が見られたり、児童同士の関わり合いが深まったりする成果が見られた。

平成27年度から研究教科を広げ、3年間、体育科と国語科の2教科について研究を進めてきた。国語科では「そがっこの話し方・聞き方」の掲示物を作成し、言語環境を整えることで、学習のあらゆる場面で活用できるような工夫を図ることや、身に付けさせたい力を具体的に設定することで、教師の指導すべきことが焦点化されるように取り組んできた。体育科では、児童に身に付けさせたい力を明確にしていくことで、児童の学びへの視点も、よりわかりやすくなり、「わかる」「できる」楽しさを感じられるように取り組んだ。「関わる」楽しさの点では、児童の人間関係や技能の実態把握をグループ編成に生かすことで成果があった一方で、児童の実態把握に課題があることもわかってきた。児童の実態把握を徹底的に行っていくことで児童一人一人の課題が明らかになり、指導と評価へとつなげていくことができると考えた。

平成30年度より、研究教科を体育科に絞り、児童に体育科アンケートを年間3回行うなど実態把握に努めてきた。国語科で培ってきた言語環境を土台としながら、「わかった」「できた」ことを児童同士で伝え合うなど「関わって」いくことで、より学びが深まっていくと考え、実践に取り組んできた。学習指導要領全面実施となった前年度、これまでの研究の積み重ねを生かし、「多様な関わり」を土台として、「わかる」「できる」楽しさや喜びを味わえる体育学習の研究に取り組んだ。コロナ禍の中で、制限もありながら1年間取り組み、各視点において成果と課題が挙げられた。今年度は前年度からの成果や課題を生かし、継続して研究を進めてきた。

(2) 今日の教育課題から

今の児童が成人して社会で活躍する頃には、我が国は厳しい挑戦の時代を迎えていると予想される。生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境は大きく、また急速に変化しており、予測が困難な時代となっている。こうした変化の一つとして人工知能(AI)の飛躍的な進化等を挙げることができるが、これらは雇用の在り方や学校において獲得する知識の意味にも大きな変化をもたらすと予測も示されている。

このような時代にあって、学校教育には、児童が様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し、情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすることが求められている。

学習指導要領では、予測困難な社会の変化に主体的に関わり、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかという目的を

自ら考え、自らの可能性を発揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身に付けられるようにすることが重要であるとされている。この力は全く新しい力ということではなく、学校教育が長年その育成を目指してきた「生きる力」が重要であることを改めて捉え直し、学校教育がしっかりとその強みを発揮できるようにしていくことが必要とされる。

体育科の目標は、「体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を見付け、その解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成することを目指す」とある。特性に応じた各種の運動の行い方及び身近な生活における健康・安全についての理解と、基本的な動きや技能を身に付けるようにする「知識及び技能」、運動や健康についての自己の課題を見付け、その解決に向けて思考し判断するとともに、他者に伝える力を養う「思考力、判断力、表現力等」、運動に親しむとともに健康の保持増進と体力の向上を目指し、楽しく明るく生活を営む態度を養う「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱を育成することが基本的な考え方となる。

これらを具現化するために、体験的な活動を重視して、「する」「みる」「支える」「知る」といった、スポーツとの多様な関わり方を土台としていながら、その中において、「わかる」「できる」楽しさや喜びを味わえるような学習を追求していくことが課題であると考えた。また、全ての児童が楽しく、安心して運動に取り組むことができるようにし、その結果として体力の向上につながる指導の在り方に配慮していく必要があり、特に、運動が苦手な児童や運動に意欲的ではない児童への指導の在り方に配慮していくことが課題である。このような取組を「多様な関わり」の中で行っていくことで、主体的・対話的な学びの実現を図ってきた。

(3) 学校教育目標から

学校教育目標
豊かな心と学ぶ意欲をもち、たくましく生きる子供の育成 － 土の子 風の子 太陽の子－
めざす子供像 知・体・徳のバランスの取れた子供の育成
土の子 (知) 確かな学力を身に付けた子
風の子 (体) 心と体を自ら鍛え、たくましい子
太陽の子 (徳) 温かく思いやりのある子

本校では、「豊かな心と学ぶ意欲をもち、たくましく生きる子供の育成」を学校教育目標に掲げ、そのめざす子供像を、「確かな学力を身に付けた子(土の子)」「心と体を自ら鍛え、たくましい子(風の子)」「温かく思いやりのある子(太陽の子)」と設定している。学校教育目標やめざす子供像を受け、研究主題を「主体的・対話的に学ぶ子供の育成－多様な関わりの中で、わかる・できる楽しさや喜びを求めて－」とした。体育科の研究を通して、「多様な関わり」の中で、「わかる」「できる」楽しさや喜びを味わわせることで、体育科でめざす子供像(後述)を具現化してきた。

学校生活におけるめざす子供像の姿
①確かな学力を身に付けることができる。
②体を鍛え、何事にもチャレンジできる。
③自分や人を大切にでき、思いやりをもつことができる。

(4) 児童の実態から

令和2年度実施の千葉県標準学力検査の結果（国語科・算数科）によると、学年や領域によって差はあるものの、ほぼ県平均と同等か県平均を上回っている。「主体的に学習に取り組む態度」の観点においても、ほぼ全学年が県平均を上回っている。令和2年度はコロナ禍の中にあっても、学習に取り組む様子は落ち着いていて、一生懸命に取り組む姿が多く見られた。決められた課題には真面目に取り組む一方で、自ら進んで考え行動することは苦手であるという一面も見られる。

日常生活では、自分の気持ちをうまく相手に伝えられなかったり、相手の話を聞くことができなかったりしたことが生徒指導上のトラブルの原因になることが多い。人とうまく関わらず、問題となっている事例が多いことから、学習の中で「多様に関わる」ことができ、日々の生活や、人間関係づくりに生かしていけるような力を育ていけるよう取り組んできた。

体育科では、令和2年度に器械運動系、陸上運動系、ボール運動系の3領域で授業研究を行い、体育科アンケートを使って意識調査を行ってきた。全体的な傾向として、「体育の学習が好きだ」という肯定的な意見が年間を通して増加した。自分に合った課題をもつことができる児童が年間を通して増加し、これは授業実践後その傾向が顕著であった。

「話し合い」「教え合い」の項目に関しても、仲間と話し合いながら学習ができると答える児童が増加したが、何のために話し合うのか、どのように話し合うのかなど、話し合いの目的や方法、場面が明確ではなかったという課題が挙げられた。関わりを意識するうえで、「なぜ」「どこで」「どのように」といった視点を持ち、必要感のある関わりができるような手立てを取っていく必要がある。上述した実態に加え、これらの意識調査の結果から、より児童一人一人の実態や意識を捉えられるよう手立てを取り、研究を進めている。これまでの積み重ねを生かしながら、主題の解明に迫るためにも、本年度も引き続き器械運動系、陸上運動系、ボール運動系の領域に取り組むこととした。

それぞれの運動領域の内容とねらい、運動の特性を踏まえて、「何を教えるのか」とともに、「どのように指導するか」を整理し、学習を進めてきた。児童が発達の段階に即した易しい運動に取り組み、自己に適した課題を見付けたり、仲間と競争したり、協働したりすることによって、「もっと運動をしたい」「できるようになりたい」「勝ちたい」等の欲求を充足し、取り組めるようにしていく中で、児童の思考を深めるために発言を促したり、気付いていない視点を提示したりするなど、学びに必要な指導の在り方を追求し、必要な学習環境を積極的に設定するようにした。

土台として学習過程の中で「多様に関わる」場面を工夫していくことで、主体的・対話的な学習を展開していくような授業改善を推進し、「関わる」活動に取り組むことで、その運動のもつ楽しさや運動をすることの喜びをより味わえるようにしていき、「主体的・対話的に学ぶ子供の育成」に迫っていきたいと考えた。

2 主題について

(1) 「主体的な学び」とは

個々の児童が自分に合った課題をもち、運動の楽しさや喜びを土台として、その課題の解決に向けて学習の見通しをもって自ら粘り強く取り組んでいくこと。運動の行い方や課題の解決に向けた方法を考察するとともに、学習を振り返り、課題を修正したり新たな課題を設定したりするなどして、スパイラル型の学習を繰り返していく学びのこと。

(2) 「対話的な学び」とは

課題の解決に向けて、児童同士や教師と話し合ったり、協力して考えを生み出したりする学びのこと。資料や自己、仲間の動きから、思考を広げたり深めたりする学びのこと。

(3) 「多様な関わり」とは

学習指導要領解説では、「運動やスポーツを『する』『みる』『支える』『知る』というような多様な関わり方を学ぶことで、自己の適性等に応じて生涯にわたり豊かにスポーツを営むことにつながる関わり方のこと」と説明されている。

「体育の見方・考え方」では、「運動やスポーツをその価値や特性に着目して、『する・みる・支える・知る』の多様な関わり方と関連付けること」と説明されている。

このことを踏まえ、本校では、主体的・対話的な学びの土台として、この「多様な関わり方」を意識し、「わかる・できる」楽しさや喜びにつながるようにしていくことをねらう。自分自身や仲間の成長を通して、運動の楽しさを実感すると共に、運動やスポーツとの豊かな関わり方を学んでいくために、「する」「みる」「支える」「知る」を「運動との関わり」「人との関わり」「場や用具との関わり」の三つに分類し、具体的な手立てを考えていく。

運動との関わり

運動との出会いや、運動の系統性を意識できるような学習過程の工夫。運動の経験を重ねていくことで、運動の特性を十分に味わい、その運動と向き合って取り組んでいくこと。

人との関わり

児童同士、児童と教師、グループ同士などで、様々な人と話し合ったり教え合ったり、動きで伝え合ったりするというように、人と関わりながら取り組んでいくこと。

場や用具との関わり

個の能力に合った場や必要な用具を考えたり選んだり、学習に関連する掲示物を見て参考にしたり、ICT機器を様々な場面で活用したりして、学習に取り組んでいくこと。

(4) 「わかる・できる楽しさや喜び」とは

「わかる」とは、運動の行い方を知ること。その運動の動きや技能を身に付けるための課題や課題の解決に向けた方法を理解すること。易しい場などで習得した動きの感覚など（こつ）を他者に伝えることができること。「できる」とは、基本的な動きや技能を身に付けること。

「〇〇がわたしのめあてになるな。」「△△のような場で練習すれば、できるようになりそうだな。」「◇◇を意識して練習するとできるよ。」というように、課題の解決に向けた活動を繰り返すことで得た楽しさや喜びが主体的な学びに向かう力、人間性等を育成し、夢中になって体育科の学習に取り組む姿につながると考える。

3 研究の目的

児童一人一人が、発達の段階に応じて主体的・対話的に学習できる指導の在り方を究明する。

4 研究の視点

(1) 運動との関わり

- ア 学習過程の工夫（運動との出会わせ方、系統を考え既習の運動経験を生かした目標の設定、運動の特性を十分に触れさせる工夫 など）
- イ 基本となる運動（様々な運動経験をさせていくことで主運動にスムーズに移行できるようにしていく、技に関連した運動遊びや運動といった、基礎となる動きや感覚づくり）
- ウ 規則・ルールの工夫 など

(2) 人との関わり

- ア グループ編成の工夫（同質・異質グループなど意図的な編成）
- イ 認め合いのための手立て（学習カードの工夫、その使い方など）
- ウ 認め合う場の工夫（学習のどの場面で行うか、形態など）
- エ アドバイス例（言葉かけ）の資料、掲示物
- オ 教え合いの視点の設定（誰が、どのようになど）
- カ 話し合いの場の設定（単元・1授業のどの場面で行うかなど） など

(3) 場や用具との関わり

ア 自分の力に応じた練習の場や方法、用具の工夫（個に合った易しい場や恐怖心を和らげる用具の使用、工夫して遊び方を広げられるような場の設定 など）

イ 学習環境の工夫（活動場所の用具の配置などの場の工夫、なりたい自分を考える一助となる掲示物や、「わかる」につながる掲示資料など、学習に関連する環境づくり）

ウ ICT機器の活用（オリエンテーションでのゲームの行い方の提示、ポイントとなる場面を動画で確認、振り返りの場面での使用） など

5 研究の方法

(1) 授業研究を夏季休業前までに各部会1授業行うこととする。授業研究を行わない学級も授業を行い、児童の変容を見取り、手立ての有効性を検証していく。11月の研究報告会では1学年1授業とし、3展開2時間での授業実践を行う。

(2) 器械運動部会、陸上運動部会、ゲーム・ボール運動部会を設け、指導案検討を部会で行う。各部会では、部会ごとの課題や研究の視点の話合い、指導案検討や授業研究後の協議等で話合いの場を設定していく。また、資料作成を並行して進める。

(3) 研究推進委員会を設ける。定期的な開催はせず、随時開催し研究全般について検討する。

(4) 児童の実態把握と課題の共通理解を行う。4月と6～10月、11月の年間3回「体育科アンケート」の意識調査を行う。

(5) 授業や単元についての児童の変容の見取りを行い、実態把握に努めることで指導と評価に生かしていく。

6 研究の組織

校長・教頭	・研究推進の指導・助言		
研究推進委員会	校長 教頭 教務主任 研究主任 研究副主任 体育主任 体育副主任		
	・研究の企画、連絡、調整、協議		
全体会	研究の実践や内容等の共通理解、研究の計画や日程の検討、授業研究の指導案検討、協議会 など		
器械運動部会	陸上運動部会	ゲーム・ボール運動部会	全体研修
4年 6年 7年	1年 3年 7年	2年 5年 たんぼぼ学級	・救急法の研修 ・GIGAスクール構想に即したICT活用研修 ・オリンピック・パラリンピック教育の研修 ・食物アレルギー対応研修 ・プログラミング教育研修
<ul style="list-style-type: none"> ・部会ごとの研究についての話合いやまとめ ・授業研究の指導案検討 ・授業研究実践後の研究協議 ・掲示物、学習資料作成 など 			

【授業実践 本時の指導】の見方



…児童の
発言



…視点との関連

○…視点1 ◇…視点2 □…視点3



…教師の
発言



…指導の際に気を付けたこと

⇒…成果 ➡…課題

II 研究の実際

1 2年間の取組

令和2年度より、千葉市研究指定（体育指導）を受け、千葉県学校体育研究大会に向け体育科の研究を進めてきた。研究主題を「主体的・対話的に学ぶ子供の育成—多様な関わりの中で、わかる・できる楽しさや喜びを求めて—」と設定し、器械運動領域、陸上運動領域、ボールゲーム運動領域の3領域で研究に取り組んでいる。初年度である令和2年度は、コロナ禍で休校期間があったり、体育科での活動の制限があったりする中、現在できる取組で全学年授業研究を行った。これまでも体育科での研究を進めてきたが、児童の実態をより把握するため、「体育科アンケート」として意識調査を年間3回行い、よりきめ細やかな具体的な手立てを講じることができるよう取り組んだ。

令和3年度は意識調査項目の改善をさらに図り、評価の3観点に照らし合わせ、知識に関する質問項目を増やし、児童の実態把握をより徹底できるように取り組んでいる。引き続き器械運動領域（4・6年）、陸上運動領域（1・3年）、ボール運動領域（2・5年）の3領域で研究を進め、領域については各学年が前年度に引き続き同領域に取り組んでいる。

2 視点について

視点1 運動との関わり

①学習過程の工夫（令和2年度 3年 跳び箱運動）

低学年の運動遊びを経て、3年生から開脚跳びやかかえ込み跳び、台上前転といった技に取り組むようになる。「できる」「できない」が明確になり、苦手意識をもつことが懸念された。そこで、単元を通して「体をフワッと浮かせる（踏み切り・突き放し）」「体をクルッと回す（回転）」「体をピタッと止める（着地）」動きを見付けていくという学習過程とし、その中で見付けた動きを学級の中で「技」として共有し、児童一人一人が身に付けられるようにしていくこととした。

3年	1	2	3	4	5	6
学習のねらい	今できる技で楽しんだり、できそうな技に挑戦したりして楽しむ。					
0 ↓ 4 5	オリエンテーション ・学習の進め方の確認 ・基本となる運動	基本となる運動 ・ケンケンパ（「パ」を開脚から両足をそろえるように変えていく） ・うさぎ跳び・馬跳び				
		跳び越し方を探してみる。	できそうな技に挑戦して楽しむ。	今できる技で楽しむ。		
				できそうな技に挑戦して楽しむ。		
						まとめ

②ICT機器の活用（令和2年度 5年 マット運動）

技の安定や組み合わせの仕方について、児童同士が互いの演技を認めたり、アドバイスしたりできるように、タブレット端末を用いた。自分たちの演技を見ながら振り返ることで、自分の演技を客観視でき、改善点を見付けやすいと考えた。演技の手本となる資料動画をタブレット端末に保存しておき、自分の演技と見比べたり、技を練習する参考にした。タブレット端末を活用し、技のポイントを意識しながら練習に取り組むことで、技能の向上とペア学習の充実を図ることができるようにした。



③「基本となる運動」の工夫（令和2年度 6年 走り高跳び）

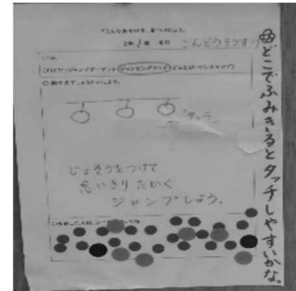
本単元の運動に苦手意識をもつ児童も主運動に抵抗なく取り組めるよう、毎時間のはじめに「8の字ジャンプ」「ミニハードルジャンプ」「バスケットゴールジャンプ」の主運動につながる基本となる運動を取り入れ、リズムカルな助走や上方に力強く踏み切る技能が身に付くように工夫した。



視点2 人との関わり

④掲示物の工夫（令和2年度 2年 跳の運動遊び）

自分が取り組んだり考えたりした跳び方や遊び方を「こんなあそび方、見つけたよ！」カードに書いて、場ごとに掲示した。児童の見付けた跳び方や遊び方を別の児童に広げることで、仲間と遊びを共有し、意欲的に活動に取り組むことができるようにした。



⑤単元を通したグループの設定（令和2年度 6年 走り高跳び）

互いの考えを認め合い、伝え合う対話的な学びを通して、学習意欲や技能の向上につなげるために、単元を通して活動する3～4人のグループをつくった。単元の前半では、毎時間の後半に記録挑戦タイムとしてグループで活動する時間を設け、学級全体で共有した技能のポイントを中心に、互いに見合うようにした。単元の後半には、グループ対抗の競争をする中で、自然とアドバイスや励ましなどの豊かな関わりがもてるように支援した。



視点3 場や用具との関わり

⑥場の工夫（令和2年度 1年 ボール投げ遊び）

児童がボール投げ遊びを十分に楽しみながら、自然と様々な投げ方が身に付けられるようにするため、「強く投げることをねらう場」、「遠くに投げることをねらう場」、「山なりに投げることをねらう場」、「狙ったところに投げることをねらう場」、「ボールを転がしての的を倒すことをねらう場」の5つの場を用意した。



⑦ボールやコート of 工夫（令和2年度 4年 ゴールボール）

ボールに恐怖心をもっている児童がいることから、体に当たってもあまり痛くないゴム製のボールに統一した。コートについては、実態調査より、ほとんどの児童が相手に向かってしっかりとボールを投げられることから、コートの縦を15m、横は8mとした。横を狭くすることで、鈴の音をより近くで感じたり、ボールを止めたりでき、ラリーが続きできる喜びにつながると考えた。また、コートをも3面用意し、1チーム5人、または6人のチームとすることで、同時に全チームが試合を行えるようにした。



3 授業実践について

(1) 第6学年3組

① 単元名 マット運動

② 視点との関連

視点1 運動との関わり

ア「基本となる運動の選択」

マット運動に必要な感覚や技能を身に付けるために、単元を通して基本となる運動を行った。本学級の技能の習得状況の実態として、技能差が大きいことから、学級全体で行う基本となる運動だけでなく、自分が設定した課題の解決につながるための基本となる運動や、自分の今の技能で足りないものを補うための基本となる運動を自ら選択して行うようにした。基本となる運動を自分で選択できるようにすることで、現在の自分の課題に合わせた動きを意識したり、どのような動作が課題に対して必要なか思考したりして、児童自身が必要感をもって主体的に取り組むことができると考えた。

視点3 場や用具との関わり

イ「課題の解決方法の選択」

本単元の「今できる技を繰り返したり、組み合わせたりする時間」では、児童同士が技の出来栄を見合い、技の安定や組み合わせの仕方について検討して、互いのよさを認めたり、アドバイスをしたりできるような学習にしたいと考えた。そこで、児童同士の関わりの中で技の行い方やこつの表現方法を児童自身が選択できるようにした。掲示物やICT機器を用いた映像資料、撮影した動画を活用して課題の解決に取り組ませた。「もう少しでできそうな技に挑戦する時間」では、上記の見合う活動以外にも、児童個人で、課題の解決の方法を選択できるようにした。自分に合った課題の解決の方法を自ら考え、選択することで、課題の本質に向き合うことができた。

課題の変容に合わせて解決の方法を変えたり、伝える仲間に合わせて表現方法を選択したりする力を養うことで、本単元に限らず、これからの学習で課題と向き合う力や、表現力の向上につなげていくことをねらった。選択肢が多いほど、解決方法を見いだす視点が変わり、互いの成長や変化に気付いたり、次時の課題に気付いたりすることができると思った。さらに、技のこつを意識しながら練習に取り組むとともに、仲間と認め合うことで、技能の向上と意欲面の向上も図ることができると考えた。

③ 学習のねらい

◎今できる技を繰り返したり、組み合わせたり、もう少しでできそうな技に挑戦したりして楽しむ。

○マット運動の行い方を理解し、回転系や巧技系の基本的な技を安定して行ったり、その発展技を行ったり、それらを繰り返したり組み合わせたりすることができるようにする。

【知識及び技能】

○自分の力に合った課題を見付け、その解決の仕方や技の組み合わせ方を工夫するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えることができるようにする。

【思考力、判断力、表現力等】

○マット運動に積極的に取り組み、約束を守り助け合って運動をしたり、仲間の考えや取組を認めたり、場や器械・器具の安全に気を配ったりすることができるようにする。

【学びに向かう力、人間性等】

④ 評価規準

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
単元 の評価 規準	① 技の行い方を言ったり書いたりしている。 ② 自分の力に合った基本的な回転系や巧技系の技ができる。 ③ できる技を繰り返したり、組み合わせたりできる。	① 自分の力に合った課題を見付けている。 ② 自分の課題に合った練習の場を選んでいる。 ③ 技の組み合わせ方を工夫している。 ④ 見つけたコツや、わかったことを仲間に伝えている。	① マット運動に積極的に取り組もうとしている。 ② 学習の仕方や約束を守り、仲間と助け合おうとしている。 ③ 準備や片付けなどで、分担された役割を果たそうとしている。 ④ 仲間の考えや取組を認めようとしている。 ⑤ 場や器具の安全を確かめている。

⑤ 学習過程

6年	1	2	3	4	5 (本時)	6	
学習のねらい	今できる技を繰り返したり、組み合わせたり、もう少しでできそうな技に挑戦したりして楽しむ。						
0 ↓ 4 5	オリエンテーション ・学習の進め方 [・ルールやマナー ・場や用具の説明 ・学習カードの書き方] ・基本となる運動の確認 ・持ち技調べ ・次時の課題を見付ける ・学習カードに記入	基本となる運動 ・全体で行う動き…動物歩き・ゆりかご ・個人で選択する動き…うさぎ跳び・連続前転・かえるの足打ち・川跳び・壁登り 今できる技を繰り返したり、組み合わせたりして楽しむ。 ・自分の課題を確認し、グループごとに活動する。 ・アドバイスの方法を選択して、課題解決に向けて話し合う。 ・互いにアドバイスし合ったことを生かして、さらに練習する。 もう少しでできそうな技に挑戦して楽しむ。 ・自分の課題に合った場に移動して練習する。 ・課題解決の方法を選択し、個人で考えたり、同じ場にいる仲間と相談したりして、取り組む。					まとめ
知・技		①		②		③	
思・判・表			①	②	④	③	
態度	③⑤	②	①		④		

⑥ 評価計画、補充的・発展的支援

単元の評価規準		評価方法及び児童の具体的な姿	発展的な支援としての声かけ
			補充的な支援としての声かけ
第1時	態度③	《行動の観察》 ・仲間と協力して用具や場の準備をしている。 ・用具などを決められた場所に片付けている。	・準備に時間がかかっているところを見付けて手伝おう。 ・自分の役割がわからなかったら表を確認して取り組もう。
	態度⑤	《行動の観察》 ・安全に気を付けながら取り組んでいる。	・友達の技が終わった後もマットがずれていないか見てみよう。 ・マットがずれていたら直そうね。 ・技が終わったら次の友達に合図を出そう。
第2時	知識・技能①	《行動の観察・学習カードからの見取り》 ・基本的な技の行い方を仲間に伝えている。 ・技のポイントを学習カードにまとめている。	・初めて取り組む友達にもわかるようにこつを詳しく書いてみよう。 ・今日練習した技のこつを、学習カードに書いておこう。
	態度②	《行動の観察・発言》 ・約束を守って行動している。 ・互いに声をかけ合っている。	・学習の仕方や約束で、改善したほうがよいところはないかな。 ・運動を始める前や後に合図を取り合うと、安全に取り組めるよ。
第3時	思考・判断・表現①	《学習カードからの見取り》 ・仲間のアドバイスから、自分の技を振り返っている。 ・自分の力に合った課題を考えている。	・技ができるようになるには、何に気を付けるかを詳しく書いてみよう。 ・もう少し易しい場で試してみよう。
	態度①	《行動の観察》 ・教師の説明を聞いて、学習に取り組んでいる。 ・積極的に楽しんで活動している。	・単元の終わりでどんな姿でいたいかを、もう一度詳しく考えてみよう。 ・失敗しても大丈夫だよ。まずは挑戦してみよう。
第4時	知識・技能②	《行動の観察》 ・自分の能力に合う技に挑戦している。 ・初動の形ができています。	・1回だけでなく、何回も成功できるように技の完成度をあげよう。 ・背中を丸くして、おへそを見る姿勢になろう。

	思考・判断・表現②	《行動の観察・学習カードからの見取り》 ・課題に合った方法で練習に取り組んでいる。 ・取り組みたい技に合った場の選択ができています。	・マットをさらに重ねたり、踏み切り板を入れたりして、自分が行いやすい場に変えてみよう。 ・側方倒立回転は、手足型がある場で練習するといいよ。
第5時	思考・判断・表現④	《行動の観察・発言》 ・仲間にアドバイスや相談をしている。 ・課題に合わせて、言葉や身振り、手振りでアドバイスしている。	・気付いたよい点や、改善点を友達に詳しく教えてあげよう。 ・手本との違いを見付けるとアドバイスがしやすいよ。
	態度④	《行動の観察》 ・仲間と励まし合って練習している。 ・仲間の技のよいところや、改善点をアドバイスしている。	・友達からもらったアドバイスをみんなにも紹介してみよう。 ・〇〇さんのアドバイスを生かすともっと上手にできそうだよ。
第6時	知識・技能③	《行動の観察》 ・技を連続で、安定して行っている。 ・技を組み合わせている。	・始めから終わりまで、スムーズに技がつながるようにしてみよう。 ・バランスやジャンプを入れると組み合わせ方が広がるよ。 ・次の動きの姿勢に戻れるといいね。
	思考・判断・表現③	《行動の観察・学習カードからの見取り》 ・課題に合わせて技を繰り返し行っている。 ・技を工夫して組み合わせている。	・同じ技でもいろいろな組み合わせ方があるから、たくさん試してみよう。 ・体の向きや次の動きを考えて組み合わせてみよう。

⑦ 本時の指導（5／6）

学習活動と内容	視点との関連 (視点1…㊦ 視点3…㊧)
1 学習の場づくりをして、準備運動を行う。 「基本となる運動」 ○全体で行う動き ・動物歩き→前転 ・ゆりかご（大きなゆりかご） ○個人で選択する動き ・うさぎ跳び ・連続前転 ・かえるの足打ち	動物歩き→前転とゆりかご（大きなゆりかご）は全体で行い、その後に児童が選択した基本となる運動を個人で取り組む時間を設定した。これは児童自身が必要感をもって主体的にマット運動に取り組むことができると考えた。

- ・かえる倒立
- ・川跳び
- ・肋木登り（壁登り）



手足を伸ばして、視線は前を向くよ。



課題から、かえるの足打ちを選んだよ。

2 学習のねらいと自分の課題を確認する。



伸膝後転の膝を曲げないように意識するよ。

3 グループごとに今できる技を繰り返したり、組み合わせたりする活動に取り組む。



タブレット端末で撮影してもらえば、自分の技を客観視できるね。



私は掲示物の方が、すぐに説明できて使いやすいな。



僕はタブレット端末で手本の動画の方が動きがわかって使いやすいよ。

⑦本時で行う技につながる基本となる運動を児童自らが選択し、主運動のどの動きにつながるのか意識して取り組むように促した。

⇒児童に「選んだ基本となる運動は、何の技につながっているのか。」と問うと、しっかりと答えることができていた。資料をよく見て主運動で行う技とつながる基本となる運動を選ぶことができていたので有効であった。

⇒資料以外の、主運動につながる基本となる運動を、児童自身に考えさせてもよかった。

課題の解決方法を選びやすくするために、活動前に自分の課題を確認する時間をとった。またグループ内で確認することで、互いの課題を意識し合い、話し合いを活発に行うことができるようにした。

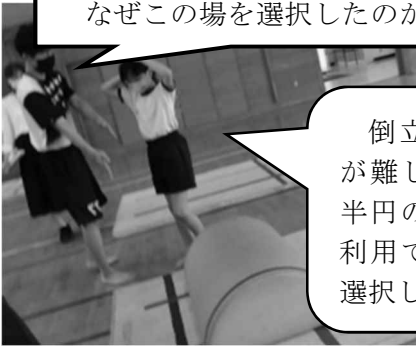
☑技の行い方やこつの表現方法を掲示物やICT機器を用いた映像資料、撮影した動画などから児童自身が選択して話し合い、課題の解決に取り組むように声をかけた。⇒よかったところ、直した方がよいところ、タイミングなど、自分たちで課題の解決方法を選択して行うことができた。

⇒技を行った後、グループで掲示物のところへ行ったり、タブレット端末で撮影した動画を見たりして話し合う時間がある分、個々が技に取り組む時間が減り、運動量の確保が難しかった。そのため、グループ内でさらに少人数グループをつくり、ローテーションでマットを使用するようになったところ、効率よく運動と話し合いを行うことができた。

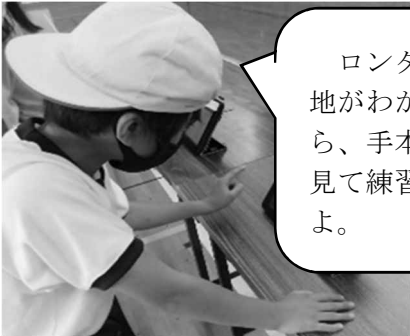
話し合いの中で、アドバイスの仕方がわからない児童に、教師が課題を解決する方法の選択肢を与えたり、示範したりして、児童が積極的に活動できるように努めた。

4 もう少しでできそうな技に挑戦する場を選択し、活動に取り組む。

なぜこの場を選択したのかな。



倒立ブリッジが難しいから、半円のマットを利用できる場を選択しました。



ロンダートの着地がわからないから、手本の動画を見て練習しているよ。

5 学習の振り返りをする。



手本の動画と仲間に撮影してもらった自分の動画を見比べて、課題を解決することができました。

6 整理運動をして、後片付けをする。

挑戦の場や補助具は、児童の考えや願いに合わせて毎時間少しずつ変化させて取り組んだ。

☑「もう少しでできそうな技に挑戦する時間」では、同じ場を選択した児童同士や個人で、課題の解決の方法を選択できるようにした。

☞参考資料として、実際にそれぞれの場で事前に撮影した動画が用意されていてよかった。グループでも個人でも、運動に浸ることができていた。

➡個人で練習している児童も楽しんで取り組んでいたが、仲間と話し合ったり、見せ合ったりする関わりがもてるような手立てが必要であった。

自分の課題に対する解決の方法のメリット・デメリットを児童が理解し、自分に合った方法を選ぶことができたか振り返る時間を設けた。本時の振り返りを踏まえ、次時の活動の見通しをもつように声をかけた。

必ず上ぐつを履いて安全に気を付け、仲間と協力して、進んで片付けられるように声をかけた。

⑧ 成果と課題（成果○ 課題●）

○児童が課題に合わせて基本となる運動を自分で選択することは難しいが、学習を積み重ねていくにつれ、資料をよく見て選ぶことができるようになった。主運動で行う技のポイントを意識してつながる動きを選択することで、技の本質に迫ることができていたので有効であった。

○児童自身が課題の変容に合わせて解決の方法を変えたり、伝える仲間に合わせて表現方法を選択したりすることができていた。特にICT機器の技の手本の動画を見て互いにアドバイスをし合うことで、技のポイントを意識でき、技の精度も向上していた。

●ICT機器を、課題解決のための一つの手段として活用したが、ねらいによっては運動量の確保が不十分な時間があった。指導計画に沿ってICT機器を活用する時間を調整することが必要であると考えた。

(2) 第3学年1組

① 単元名 幅跳び

② 視点との関連

視点1 運動との関わり

ア「学習過程の工夫」

単元前半では、助走のリズムや強い踏み切り、着地の姿勢など、幅跳びの基礎となる動きを身に付けることができるよう、ポイントや練習方法を確認する時間や場を設定した。学習のはじめに一人一人の課題を確認し、学習カードや場ごとの掲示物で動きのこつの確認をしたり、声をかけたりした。学習のおわりには、課題が達成できたかについて挙手や学習カードで確認し、次時の自分の課題を考えることができるようにした。

さらに、単元後半のグループごとの競争の中や、競争の合間にも、自分の課題について振り返る時間を設け、基礎となる動きの練習をすることができるような場を設定した。幅跳びに必要な知識や技能を身に付けられる時間を設けることで、遠くに跳べたという感覚を味わうことができ、楽しく運動することができるようになると考えた。

視点2 人との関わり

イ「グループ編成の工夫」

単元前半では、友達と自然に関わり合うことができるよう、教師が同じ動きを練習する児童同士で意図的に3～4人のグループを組んだ。掲示物や学習カードなどを参考にすることで、言葉では言えなくても、よかった点や改善点を指で示したり、自分の動きとの相違点を見付けたりして、仲間に自分の思いを伝えることができるようにした。

単元後半の競争を行う時間では、技能面や人間関係を考慮し、教師が意図的に4人ずつの小グループを組んだ。少人数にすることで、緊張せずに安心して、自分の思いを伝えることができるように考えた。さらに、競争の方法を選んだり考えたりすることで、友達と関わり合いながら楽しく競争することができるようにした。

視点3 場や用具との関わり

ウ「掲示資料の活用」

児童一人一人が、幅跳びの基礎となる動きを身に付け、安全に楽しく活動することができるよう、それぞれの練習の場に掲示物を用意し、動きのこつを書いた色紙を、掲示物に貼ったり直接書き込んだりして、視覚的に捉えることができるようにした。

③ 学習のねらい

◎幅跳びゲームで競争をして楽しむ。

○幅跳びの行い方を理解するとともに、5～7歩程度の助走から踏み切り足を決めて、前方に強く踏み切り、遠くへ跳ぶことができるようにする。

○膝を柔らかく曲げて、両足で着地する動きを身に付けることができるようにする。

【知識及び技能】

○友達との競争の仕方を考え、競争の方法を選ぶことができるようにする。

○友達のよい動きや変化を見付けたり、考えたりしたことを友達に伝えることができるようにする。

【思考力、判断力、表現力等】

○幅跳びに進んで取り組み、きまりを守って誰とでも仲良く運動したり、勝敗を受け入れたり、友達の考えを認めたりすることができるようにする。


【学びに向かう力、人間性等】

⑥ 評価計画、補充的・発展的支援

単元の評価規準		評価方法及び児童の具体的な姿	発展的な支援としての声かけ
			補充的な支援としての声かけ
第1時	態度⑤	《行動の観察》 ・安全に気を付けながら取り組んでいる。	・セーフティマットや踏み切り板がずれていたら直すよう、みんなで声をかけ合って活動しようね。
			・順番に練習しようね。 ・横切らず、安全に移動しましょう。
第2時	知識・技能③	《行動の観察・学習カードからの見取り》 ・着地の仕方をワークシートに書いたり、言ったりしている。 ・両足で着地している。	・どうしたら上手に着地できるか、こつを友達にも紹介してみよう。
			・どんなこつがあるか、友達に聞いてみよう。 ・手を前に出して両足で着地するといいいよ。 ・最後に「ん」の形になるといいね。
	態度①	《行動の観察・学習カードからの見取り》 ・教師の説明を聞いて、学習に取り組んでいる。 ・積極的に楽しんで活動している。	・単元の終わりでどんな姿でいたいかわかしく考えてみよう。 ・見ているから安心して、挑戦してみよう。 ・着地の練習は、セーフティマットで行うとけががなくて、怖くないよ。
第3時	知識・技能②	《行動の観察》 ・5～7歩の助走で強く踏み切っている。 ・踏み切り足を決めて踏み切っている。	・もっと遠くに跳ぶために〇〇の動きを掲示物で確認してみよう。
			・ケンステップや、手拍子など、リズムをとりながら練習してみよう。 ・ロイター板や踏み切り板の場で練習するといいいよ。
第3時	思考・判断・表現②	《行動の観察・発言・学習カードからの見取り》 ・友達にアドバイスをしたり、こつや練習方法について話し合ったりしている。	・友達の見てほしいところを聞いて、そこを見てあげよう。
			・助走の歩数が合っているかどうか友達の動きを見て教えてあげてね。 ・踏み切り足はいつも同じだったか教えてあげよう。
第4時	態度④	《行動の観察・発言・学習カードからの見取り》 ・友達と励まし合って練習している。 ・友達によいところや改良点を伝えている。	・友達にアドバイスしてもらったことを紹介してみよう。
			・〇〇さんが、上手だったので、やり方を聞いてみよう。 ・友達にしてもらったアドバイスが生かされるといいね。

第5時	思考・判断・表現①	《行動の観察・学習カードからの見取り》 ・自分の課題に合わせて場を選んでいる。	・自分が行いやすいように、用具を入れ替えてもいいよ。
			・今日のめあてに合わせて場を選ぶといいよ。 ・掲示物やカードを参考に選んでみよう。
第6時 (本時)	知識・技能①	《行動の観察・発言・学習カードからの見取り》 ・幅跳びの行い方を友達に伝えたり、学習カードに書いていたりしている。	・友達が発見した跳び方のこつも学習カードに書いておくといいね。 ・今日練習してできるようになったことや、こつをカードに書いておこう。
	態度③	《行動の観察・発言》 ・勝敗にかかわらず、よかった点や改善点を振り返っている。	・グループの友達とよかったところや、直したほうがよいところを話し合ってみよう。 ・次回どうすればよくなるか学習カードに書いておくといいね。 ・これまでに学習したことを生かしてできたことはあったかな。
第7時	思考・判断・表現②	《行動の観察・発言・学習カードからの見取り》 ・友達にアドバイスをしたり、こつや、競争の方法について話し合ったりしている。	・楽しく競争をするために、どんなルールがあるといいか考えてみよう。 ・上手に跳べた友達には、よかったところを詳しく伝えられるといいね。 ・学習カードから、楽しくできそうなルールを選んでみよう。
	態度①	《行動の観察・学習カードからの見取り》 ・積極的に楽しんで活動している。	・もっと楽しく競争をするためには、どんなルールがあるといいか、考えてみよう。 ・競争の方法を選んで、自分の得意な方法で楽しめるといいね。

⑦ 本時の指導 (6 / 7)

学習活動と内容	視点との関連 (視点1…㊦ 視点2…◇ 視点3…㊧)
<p>1 学習の場づくりをして、準備運動を行う。</p>  <p>ふわっと跳んで、「ん」の形で着地だね。</p> <p>「基本となる運動」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ケンパ、ケンパ、1、2、3! ・駆け足ジャンプ ・ふわっと着地 	<p>安全に、素早く場づくりができるよう、事前に分担を決めておいた。</p> <p>それぞれの基本となる運動が、技のどの動きにつながるのか説明し、一つ一つのポイントを確認して行った。</p>

2 学習のねらいや学習ルール、規則を確認する。



競争の仕方は星取り対決にしよう。

④前時までに見付けた動きのポイントやこつを掲示物で確認した。
⇒動き方やアドバイスのポイントを確認することで、的確なアドバイスができた。
➡安全面についての学習ルールや勝敗を決めるときポイントなどをきちんと理解できていない児童がいたため、掲示物等を使い確認するとよかった。

3 相手グループと規則を決め、活動する。



跳んでもいいかな。

スムーズに競争を始めることができるよう、事前に競争する相手を決めておいた。

準備ができたから、跳んでいいよ。

競争するグループや規則をすぐに確認することができるよう、掲示カードを用意した。



踏み切り板の目印のところを強く、踏み切っていていいね。

⑤仲間と教え合ったり励まし合ったりしながら学習できるように、教師が意図的にグループを組んだ。
⇒よい動きを言葉や実際に動きを見せて伝える様子が見られた。



手を上にあげて、振り下ろすと遠くまで跳べるね。

➡伝え合う活動が苦手な児童もいたため、教師が積極的に声かけをし、関わり合うことができるようにするとよかった。

「ん」の形で着地できているね。

⑦競争を行っていない児童が基礎となる動きを練習することができるよう、練習の場を用意し、課題に合わせて必要な用具を選んで活用できるようにした。



ここでは着地の練習をするといいね。「ん」の形だね。

⇒競争でうまくいかなかったところについて、できるようになりたい場を選んで、積極的に練習することができた。

➡課題に合わせて場を選ぶことができない児童には、場の使い方や掲示物を確認するよう声をかけるとよかった。



跳ぶのが苦手な人がいるみたい。どんな規則がいいかな。

⑧競争の規則をグループごとに相談する時間を設けた。

合計得点と、最高記録を組み合わせれば、みんなで楽しく競争できそうだね。

⇒競争の方法を選んだり考えたりすることで、仲間と関わり合いながら楽しく競争することができた。



しっかりと上に跳んでいるね。



スピードをつけて、リズムよく助走するといいね。7歩助走も練習してみよう。

4 学習の振り返りをする。



遠くまで跳んでいたね。7歩だと、どんなリズムで跳んだらいいかな。

5歩助走より、7歩助走のほうがスピードがつくので遠くまで跳べました。

タン、タンタタタタンがいいかな。次回、練習して確かめてみよう。

5 整理運動をして、後片付けをする。

様々な練習の場を用意し、児童が必要なものを選んで活用できるようにした。

☑もっと遠くに跳ぶためにはどうしたらよいか問いかけることで技能に着目することができるようにした。

⇨グループで競争に勝つという目的を達成するために、協力して意欲的に基礎となる動きを練習する姿が見られた。

➡グループごとに移動するので、一人一人に合った練習の場を選ぶことができない児童もいた。

本時の振り返りをし、次時の活動の見通しをもつように声をかけた。

☑上手に跳んでいた児童を称賛し、掲示物を見たり、書き込んだりしながら確認することで、活動を振り返り、次時の課題を見付けることができるようにした。

⇨技能を高めるための動きのポイントやコツを共有することができた。

➡一人一人が動きについてどんな気づきがあったのか正確に把握するために、カードを書く時間を十分に確保する必要があるがあった。

自分が準備したところを片付けるよう声をかけた。

⑧ 成果と課題 (成果○ 課題●)

○幅跳びの基礎となる動きを練習する時間を十分に確保したことで、踏み切りや着地などの仕方を理解し、遠くまで跳ぶための技能が身に付いた。

○掲示物を見ながら全体で振り返りをし、動きのポイントやコツを書き込んでいくことで「自分たちで考えたポイント」という意識が高まり、活動や伝え合いの際に活用できた。

●練習の場や活動の場が多く、広がりすぎていたため、準備や片付けに時間がかかり、運動量の確保が難しかった。また、教師の目の行き届かなくなり、安全に活動するための学習ルールを徹底することが難しかった。

(3) 第5学年1組

① 単元名 ソフトバレーボール

② 視点との関連

視点1 運動との関わり

ア「基本となる運動の場の設定」

単元を通して、技能の向上を促すための基本となる運動の場を設定して取り組んだ。「ボールを持っていないときの動きに特化した場」と「ボールを打つことに特化した場」の2つの場面を意識した場づくりを行った。基本となる運動の前半の時間は学級全体で共通の運動を行い、後半の時間で自分やチームの課題に合わせた場を選んで取り組ませるようにした。どの場を選んで取り組むかは、チーム内で相談して決めるようにし、自分やチームの課題から、どの活動の場を選べば解決していけるかを考えるという、主体的に課題を解決しようとする態度の育成をねらった。

視点2 人との関わり

イ「ICTの機器の活用」

タブレット端末を用いてゲームを録画しておき、休憩時間に再生して動きを確認し、話し合いを深められるようにした。タブレット端末は、チームの1人がやや俯瞰的にコートを見られるような場所から録画した。自分やチームの動きについてできていることや課題を確認できたり、相手チームの動きの特徴や空いているスペースなどを見付けたりする手助けとなり、より深く価値のある話し合いへとつながっていくと考えた。

ウ「コート内の分割」

自陣と敵陣のコートを同様に9等分割し、それぞれの枠に数字を振り、さらに色別にテープを貼った(資料1)。タブレット端末で録画した動画を見るときに、「自分たちは黄色に集まっているから、〇〇さんは青色の1、〇〇さんは黄色の2、私は緑色の3に分かれて、バランスよく守ろう」や「相手は青色にすることが多いから、後ろの緑色の1や3を狙おう」など、より具体的で明確な作戦を立てることの手助けになると考えた。

エ「評価シールの活用」

よりよい人間関係形成は、チームスポーツの楽しさを一層味わえることにつながると考え、児童同士が相互評価をする手助けとなる評価シールを作成して取り組んだ(資料2)。評価シールは、「貢献」「承認」「感謝」の気持ちを色別で表すものとした。「貢献」は、主に自分が仲間のアドバイスのおかげで運動のこつがわかった場面で使用した。「承認」は、主に仲間が自分の課題やチームの課題を解決できた場面で使用した。「感謝」は、仲間のおかげでゲームに勝てたり、よいプレイができたりしたときなど、少し広い意義で感謝の気持ちを表したい場面で使用した。これは単元を通して、いつでも、どの活動の場面でも貼り合ってよいこととして、1時間の学習中に必ず1枚以上は貼り合うことをきまりとした。学習中にもらった評価シールは、自分の赤白帽子に貼っておき、学習後に学習カードに貼り直して保存した。単元を通じた自分の変容を把握することにつながると考えた。

(資料1) 9等分割図

	1	2	3	緑
	1	2	3	黄
	1	2	3	青
ネット	1	2	3	青
	1	2	3	黄
	1	2	3	緑

(資料2) 評価シール



③ 学習のねらい

- 簡単なルールや、作戦を工夫してソフトバレーボールを楽しむ。
- ソフトバレーボールの行い方を理解するとともに、ボール操作とチームの作戦に基づいた位置取りをするなどのボールを持たないときの動きをしたり、片手または両手でボールを相手が捕りにくい場所へ返球したりすることができるようにする。 【知識及び技能】
- ルールを工夫したり自己やチームの特徴に応じた作戦を選んだりするとともに、自分や仲間の考えたことを周りに伝えることができるようにする。 【思考力、判断力、表現力等】
- ソフトバレーボールに積極的に取り組み、ルールを守り助け合って運動したり、勝敗を受け入れたり仲間の考えや取組を認めたり、場や用具の安全に気を付けたりすることができるようにする。 【学びに向かう力、人間性等】

④ 評価規準

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
単元の評価規準	<ul style="list-style-type: none"> ①ソフトバレーボールの行い方を言ったり書いたりしている。 ②ボールの方向に体を向けて、その方向に素早く移動することができる。 ③味方が受けやすいようにボールを上方向につなぐことができる。 ④片手または両手で相手コートに打ち返すことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ①ルールを工夫したり、自分やチームの特徴に応じた作戦を選んだりしている。 ②自分やチームの課題に合った練習の場を選んでいる。 ③動き方や打ち方について見つけたコツを、仲間に伝えている。 	<ul style="list-style-type: none"> ①ソフトバレーボールに積極的に取り組もうとしている。 ②ルールを守り、仲間と助け合って運動しようとしている。 ③ゲームの勝敗を受け入れようとしている。 ④仲間の考えや取組を認めようとしている。 ⑤用具などの準備や片付けを、仲間と一緒にしようとしている。 ⑥場や用具の安全を確かめている。

⑤ 学習過程




5年	1	2	3	4	5	6 (本時)	7	
学習のねらい	簡単なルールや、作戦を工夫してソフトバレーボールを楽しむ。							
0 ↓ 4 5	オリエンテーション ・学習の進め方 ・学習のルールやマナー ・基本となる運動の行い方 ・用具の準備と片付けの行い方 ・チーム内でラリー ・試しのゲーム	基本となる運動 ・オーバーハンドパス ・アンダーハンドパス ・アタック ・サーブでの的当て ・チームでラリー						
		簡単なルールでソフトバレーボールを楽しむ。	・自分の課題を中心とした上で、チームとしての課題を設定して、ゲームに取り組む。			作戦を工夫してソフトバレーボールを楽しむ。		
							まとめ	
知・技		①	②	③		④		
思・判・表			③		②		①	
態度	⑤⑥	①		②	③	④		

⑥ 評価計画、補充的・発展的支援

単元の評価規準		評価方法及び児童の具体的な姿	発展的な支援としての声かけ
			補充的な支援としての声かけ
第1時	態度⑤	《行動の観察》 ・仲間と協力して、用具や場の準備や片付けをしている。	・自分たちの担当の用具の準備、片付けが終わっても、他にできることはないか考えて行動しよう。 ・自分の担当の用具を友達と協力して素早く準備、片付けをしよう。
	態度⑥	《行動の観察》 ・場や用具の安全に気を付けながら取り組んでいる	・使った場や用具で、次の人が安全に使えるように確認してから次へ行こう。 ・ネットのたるみやボールの空気の入具合などで気になったら、先生や友達に伝えよう。
第2時	知識・技能①	《行動の観察・学習カードからの見取り》 ・ボールの打ち方やボールを持っていないときの動き方などの行い方を仲間と伝え合っている。 ・打ち方や動き方のコツを学習カードにまとめている。	・こつは1つだけとは限らないから、より上手にできるためのこつを探そう。 ・誰が見てもわかるように、言葉だけではなく絵や図なども用いて、学習カードにまとめよう。 ・友達から教えてもらったこつをやってみて、こつを知ろう。 ・友達から教えてもらった打ち方や動き方のこつを忘れないように学習カードに記録しておいて、次時に生かそう。
	態度①	《行動の観察》 ・失敗を恐れずに、夢中になってソフトバレーボールに取り組んでいる。	・なりたい自分をいつもイメージして取り組んでみよう。 ・失敗が成長へのポイントだから、恐れず何度でもチャレンジしてみよう。
第3時	知識・技能②	《行動の観察》 ・ボールを正面で体の中心で捉えたり、落下地点に素早く移動したりしている。	・落下地点に入るだけではなく、その後の方向にボールを出すか、次の動きもイメージしてやってみよう。 ・基本となる運動で、落下地点に素早く入る場やキャッチの場など、ボールを持っていないときの動きに特化した場を選んで練習しよう。
	思考・判断・表現③	《行動の観察・発言》 ・ボールの打ち方やボールを持っていないときの動きについて、見付けたこつを仲間に伝えている。	・言葉だけのこつではなく、より相手に理解してもらえるような伝え方を考えて伝えよう。 ・友達に教えてもらったこつをやってみて自分もうまくできたこつを伝えよう。

第4時	知識・技能③	<p>《行動の観察》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・味方が受けやすいようなボールを打っている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ボールを上げるときに、パスをする友達の名前も呼ぼう。 ・友達がプレイしやすいように、ボールを上上げることを意識してやってみよう。
	態度②	<p>《行動の観察》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ルールを守りながらゲームを行っている。 ・仲間と助け合ったり声をかけ合ったりしながら運動をしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今のルールの改善点があるかどうかも考えながら取り組もう。 ・友達を励ます声かけやアドバイスする声かけなど、友達を支えることのできる様々な声かけを考えて行おう。 ・ゲームは、ルールを守らないと成り立たないことを理解して取り組もう。 ・ゲーム中、友達に「ドンマイ」「ナイス」の声かけを意識してやってみよう。
第5時	思考・判断・表現②	<p>《行動の観察》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分やチームの課題を解決するために、基本となる運動で場を選んで取り組んでいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分のめあてだけでなく、どうしたらチームが勝てるかのめあてもいつも考えながら取り組もう。 ・自分のめあてを明確にしてから、それを解決できる場を選んで取り組もう。
	態度③	<p>《行動の観察・学習カードからの見取り》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ゲームに勝っても負けても、自分のチームの取組を称賛している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・勝敗に関係なく、相手のよかったところも認めて伝え合い、互いのよりよい成長へとつなげていこう。 ・勝敗に関係なく、最後までがんばった自分のチームのよかったところを伝え合い、認め合おう。
第6時 (本時)	知識・技能④	<p>《行動の観察》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の狙ったところにボールを打っている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今の出来に満足しないで、より狙いを狭めてパスを上げたり相手コートに打ったりしてみよう。 ・狙ったところにボールがなかなかいかなくても、パスをつなぐときは上に、相手コートに返すときは、とにかくつないで返そう。
	態度④	<p>《行動の観察・発言》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・仲間の考えや取組に対して、称賛する声かけや評価シールを貼っている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・個人として、また、チームとしてもよいプレイを認めて、より多く伝えよう。 ・友達のプレイで助かった場面や、すごいと思ったことはなかったかを考えて、1つでもよいから伝えよう。
第7時	思考・判断・表現①	<p>《行動の観察・発言》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分やチームの特徴から、作戦を選んで話し合い、決まった作戦を実行している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分たちのよさを出すための作戦なのか、それとも対戦相手のよさを出さなくさせるための作戦なのか、ねらいをもって作戦を選んで実践しよう。 ・チームで考えた作戦カードをもう一度見返して、どれを使いたいかなを考えよう。

⑦ 本時の指導（6／7）

学習活動と内容	視点との関連 (視点1…⑦ 視点2…◇◇◇)
<p>1 学習の場づくりをして、準備運動を行う。 2 基本となる運動を行う。</p> <div data-bbox="252 405 699 667" style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <p>「基本となる運動」の場</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オーバーハンドパス ・アンダーハンドパス ・アタック ・サーブでの的当て ・チームでラリー </div> <div data-bbox="252 674 571 909">  <p>ボールの落下地点に素早く入って、顔の正面でボールを受けよう。</p> </div> <div data-bbox="236 920 464 1205"> <p>ボールをつなぐことが課題だから、チーム内でラリーをしよう。</p> </div> <div data-bbox="469 958 799 1211">  </div> <p>3 学習のねらいとチームや自分の課題を確認する。</p> <div data-bbox="225 1301 571 1525">  <p>チームのめあては、がんばってラリーを続けることだね。</p> </div> <div data-bbox="225 1525 810 1637"> <p>チームのめあてを達成するために、私は足をたくさん動かして、ボールを拾うよ。</p> </div>	<p>基本となる運動を行う前に、自分やチームの課題を解決するための場を選ぶように声をかけた。</p> <div data-bbox="826 488 1433 1070" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>⑦自分やチームの課題をもとにして、基本となる運動の様々な場を選んで取り組んだ。 ⇒自分やチームの課題をしっかりと把握した上で、それを解決するための場を選んだり、新しい運動の場をチームで考えたりして取り組むことができた。</p> <p>➡オーバーハンドパスやアンダーハンドパスなどを行う際に、用具を床に置いて行っている子供の様子から、安全面を配慮した声かけや行い方を考える必要があった。</p> <p>➡基本となる運動の場が多かったため、使われていない場があった。学習を進めていく中で、児童の技能の実態や必要感に応じて精選する必要があった。</p> </div> <div data-bbox="826 1077 1433 1339" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>◇仲間の取組を認め合う「評価シール」を活用した。 ⇒基本となる運動の活動の場面でも、仲間の成長や取組を伝え合うことができた。</p> <p>➡評価シールの貼り合いに時間がかかり、次の活動に遅れが出ている児童がいた。</p> </div> <div data-bbox="826 1368 1433 1570" style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <p>学習のねらいが「作戦を工夫してゲームを楽しむ」であることから、チームの課題を解決するために、自分ができることや役割を意識して取り組むように声をかけた。</p> </div>
<p>4 ゲームを行う。(3ゲーム)</p> <div data-bbox="252 1697 427 1727" style="border: 1px solid black; padding: 2px;"> <p>【基本のルール】</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・1チーム4人（コートには3人。出ない1人は、作戦リーダー[タブレット端末で録画]を務める）。 ・ゲーム時間は3分。試合間は3分とし、そこで次ゲームに向けた話し合いを行う。 ・ネットの高さは、170cmとする。 ・ボールの重さは100gとする。 ・ネットは触らない。 ・点が入ったら、両チームとも決まったローテーションをする。 ・3回（2回でも可）のボールタッチで、相手のコートに返す。ただし、1回で返してはならない。 ・3回のボールタッチの中で、1回はキャッチしてもよい。ただし、相手コートに返すときは、投げ入れてはならない。 ・サーブ権は点の得失に関係なく、チーム間で1回ずつ交代して行う。サーブはエンドラインから打つ。 ・サーブの打ち方に決まりはない。届かない児童は、前の線まで出たり、下投げて投げ入れたりしても構わない。サーブミスは2回連続で失敗したら、相手の点数となり、相手にサーブ権が移る。 	

上にボールを投げるから、しっかり打ち返してね。いくよ。



◇自分やチームの動きをタブレット端末に録画しておき、試合間で確認した。
□自分やチームの動きを確認することで、課題をより明確に把握することができた。
➡録画担当者は、ただ録画するだけではなく、作戦リーダーとして仲間にアドバイスをしながら録画する必要があった。



3人とも緑色のコートにいるから、前にも出て、バランスをとろう。

◇自分やチームの動きから、作戦を立てるためにコート内の9等分割図を用いた話し合いを行った。
□9等分割図を用いて話し合うことで、より具体的に作戦を立てたり、視覚的に理解したりすることができた。
➡9等分割図を上手に活用しているチームと活用できていないチームの差が大きかった。9等分割図を活用した作戦や話し合いの内容を取り上げ、活用の仕方全体に広めていく必要があった。

どうしてラリーが続かないのかな。動画で、自分たちの動きを確認しよう。



◇仲間の取組を認め合う「評価シール」を活用した。
□よかったプレイや仲間の取組を認め合い、チームとしてソフトバレーボールを楽しむことにつながった。
➡作戦を考える時間に評価シールを貼り合ったので、作戦を立てることが疎かになっていたチームがあった。作戦を立てる時間と評価シールを貼り合う時間を明確に分けて行う必要があった。



ボールをしっかりとのうのほうに上げてくれたから、打ちやすかったよ。

5 チームや自分の学習の取組を振り返る。

サーブが入らなかったから、次回の基本となる運動の場でやろう。



チームの課題を解決できたかを中心に振り返りをさせたが、新たに出てきた課題も考えて、次時の基本となる運動のどの場を選んで取り組めば解決できそうかの見通しももてるように声をかけた。

6 整理運動をして、用具を片付ける。

⑧ 成果と課題 (成果○ 課題●)

- 基本となる運動で、様々な活動の場を設定することで、自分やチームの課題を解決するための場を主体的に考えて取り組む力の育成につなげることができた。
- タブレット端末を使ったことで、自分やチームの課題をよりの確に捉えることができた。
- ソフトバレーボールの運動においては、一定の技能が身に付いていないと、運動する喜びや楽しみを味わうことが難しいことがある。児童一人一人の、ボールを打ったりボールの落下地点まで動いたりする技能を、より向上させるための活動内容や取組を考える必要がある。

III 研究のまとめ

1 成果と課題

(1) 器械運動部会

① 授業実践より

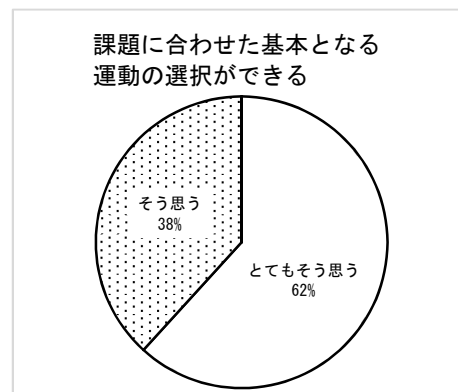
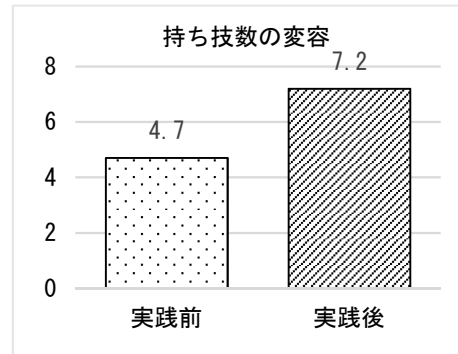
視点1 運動との関わり

○ 成果

- ・ 毎時間の学習で、自分が設定した課題の解決につながるための基本となる運動や、自分の今の技能で足りないものを補うための基本となる運動を自ら選択して行うようにした。どのような動作が課題に対して必要なか思考し、児童自身が必要感をもって主体的に取り組むことができた。
- ・ 持ち技数が実施前に比べ、1.5倍以上に増えている。主運動で行う技へのつながりを意識した基本となる運動の選択や、技の行い方を資料で提示したことにより、持ち技を増やすことができたと考える。

● 課題

- ・ 主運動につながる基本となる運動では、自分の課題を意識して選択するよう呼びかけたが、教師が用意した基本となる運動の資料から選択していたため、児童の考えで発展させることができなかった。自分の課題の解決につながる基本となる運動を、個々の自由な発想と必要感を尊重して児童から出してもよかった。



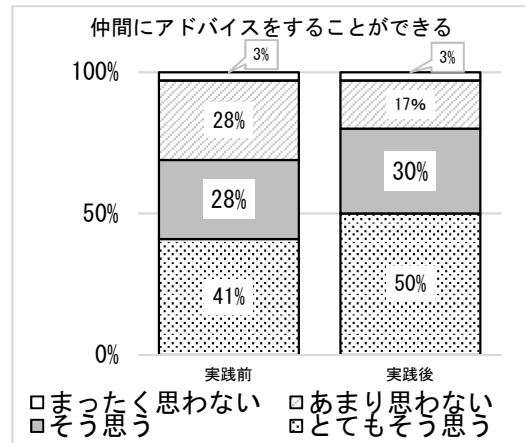
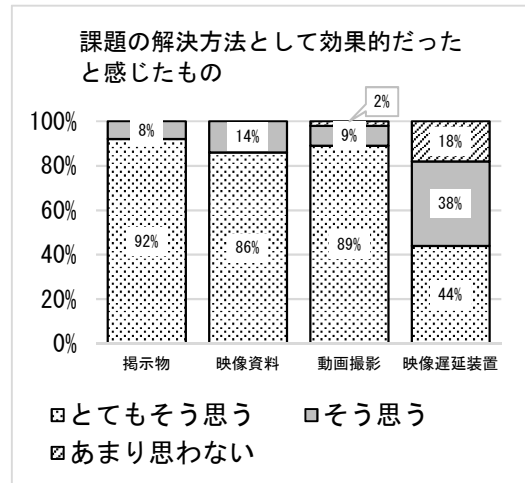
視点3 場や用具との関わり

○ 成果

- ・ 課題の変容に合わせて解決方法を変えたり、伝える仲間に合わせて表現方法を選択したりする中で、課題の解決方法のメリットやデメリットを意識して選択することができるようになった。また、どの方法も効果的に活用することができた。
- ・ 仲間にアドバイスする際にも、児童が活用しやすい手段を用意したことで、言葉で説明が苦手な児童や、動きを伝えるのが苦手な児童などが、それぞれの状況に対応した方法を選択することができた。これまでアドバイスをするのが苦手な児童も、積極的に話し合うことができるようになった。

● 課題

- ・ 多様な関わりを意識して指導してきたが、掲示物やICT機器の活用以外に、体育科の特性である体を通して伝え合うことも大切に行きたい。児童も教師も手本として示範して見せることは、有効な方法だと考える。課題の解決方法は一つではなく、児童たちが自ら選択できる力をこれからも身に付けさせていきたい。



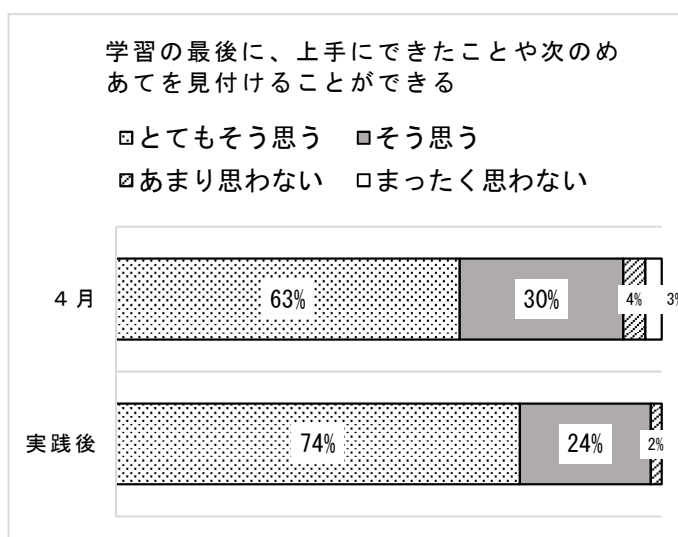
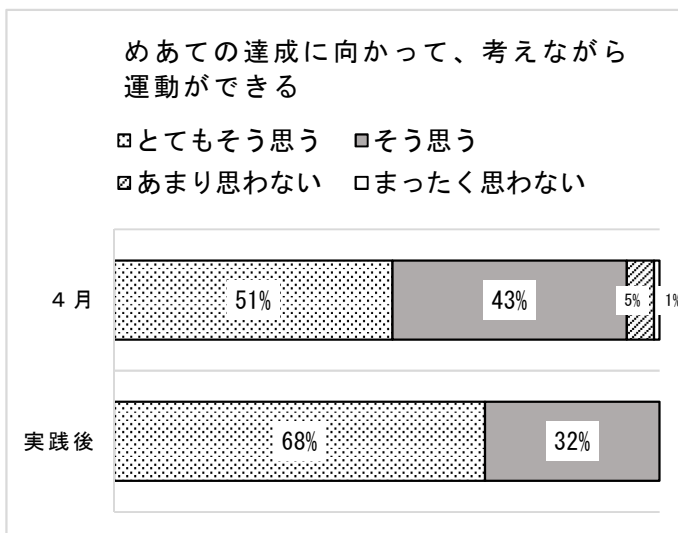
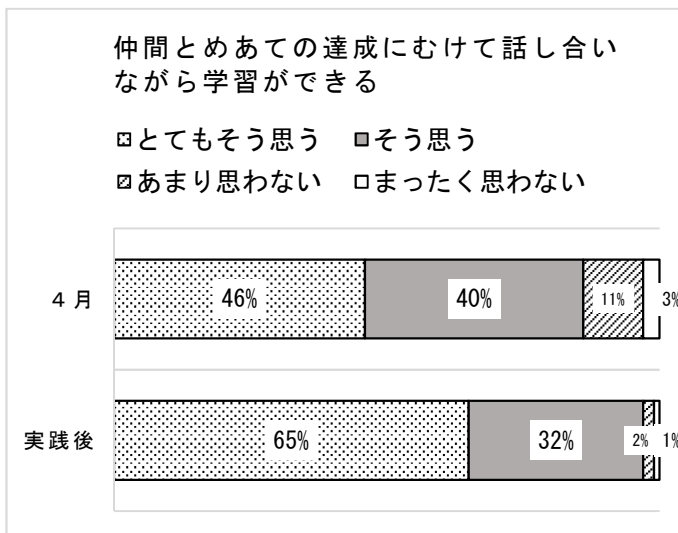
②意識調査より

「仲間とめあての達成に向けて話し合いながら学習できる」に関して肯定的な回答が増えている。グループでの学習により、単元を通して同じ仲間と技を見合うことで技の安定や組み合わせの仕方について検討し、アドバイスをし合えたことが結果に繋がっていると考えられる。また、ICT機器の活用により、動作を見返す機会をつくり、技の出来映えを客観視できたことで、技のどこをどのように改善すればよいかを話し合うことができるようになった。

「めあての達成に向かって、考えながら運動ができる」に関して、肯定的な回答が増え、否定的な回答がほぼなくなっている。これは、個々が課題の解決方法を選択できるようにしたことが要因の一つであると考えられる。掲示物や映像資料、撮影した動画の活用など、自分に合った課題の解決方法を考え選択したことにより、児童自身で自らの課題に向き合い、仲間からアドバイスをもらいながら技能の向上を目指すことができた。

「学習の最後に、上手にできたことや次のめあてを見付けることができる」に関して、肯定的な回答が増えている。これは「単元の終わりにどのような自分になっていたか」ということについて単元を通して意識させ、振り返りや次時の課題を見付ける時間を十分に確保したことで意識が向上したと考えられる。

しかし、児童自身は自分に合った課題を見付けることができるようになったと感じているが、教師の見取りとでは差がある。今後は、自己の能力に合った課題を見付けることができない児童に対し、教師が児童一人一人に課題の修正を働きかける手立てが必要だと感じた。



(2) 陸上運動部会

①授業実践より

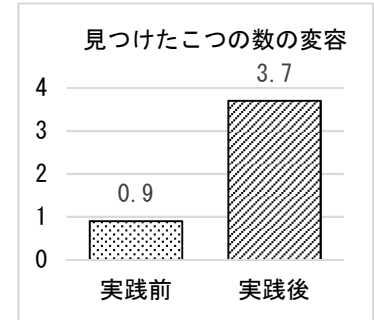
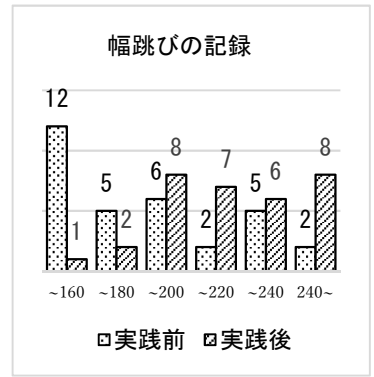
視点1 運動との関わりについて

○成果

- 前半の学習で、基礎となる動きを身に付けることができるよう十分に時間を設けることで、助走や踏み切り、着地のコツを身に付けることができ、跳力の向上につながった。また、後半の学習にも競争の結果を振り返り、基礎となる動きを練習する場に戻ることができるようにしたことで、遠くに跳べたという感覚を味わうことができた。
- 活動の中で自分の課題について振り返り、練習する時間を設けた。グループで助言し合ったり、見付けたコツを全体で共有したりすることで、幅跳びに必要な知識や技能を身に付けることができた。

●課題

- 課題に合わせて場や練習方法を選ぶことが難しい児童もいた。掲示物や教師の積極的な声かけ等が必要だった。また、5歩助走で跳ぶよう指導していたが、児童の実態によっては5歩～7歩助走を認めるなど、教師が領域の系統性を意識して指導する必要があった。



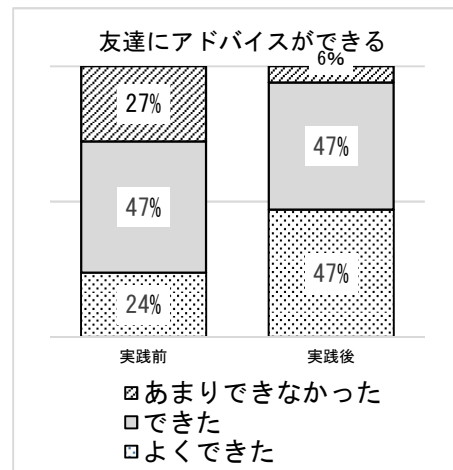
視点2 人との関わりについて

○成果

- 技能面や人間関係を考慮した小グループで活動することで、関わりを深め、活発にアドバイスし合うことができた。また、掲示物や学習カードを活用することで、どの児童も安心して自分の思いを伝えることができた。

●課題

- 伝え合う活動が苦手な児童には、教師が具体的にアドバイスの方法を助言することで、関わり合うことができるようになることを考える。また、児童の実態に合わせて、教師の支援の方法を具体的に設定しておく必要があると感じた。



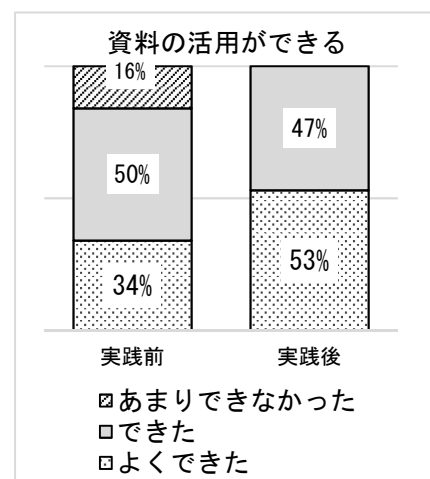
視点3 場や用具との関わりについて

○成果

- それぞれの練習の場に掲示物を用意し、動きのコツを書いた色紙を貼ったり書き込んだりした。跳ぶ度に掲示物を見ることで、自分の課題を視覚的に捉えることができ、幅跳びの技能の向上につながった。
- 振り返りの時間に書き込んだ動きのコツを確認することで、次時の活動の見通しや課題を見付けることができる児童が増えた。

●課題

- 基礎となる動きのコツがわかり、身に付けることができたかを一人一人正確に把握することが難しかった。学習カードからの見取りを確実なものとするために、記入する時間を十分に確保する必要があった。



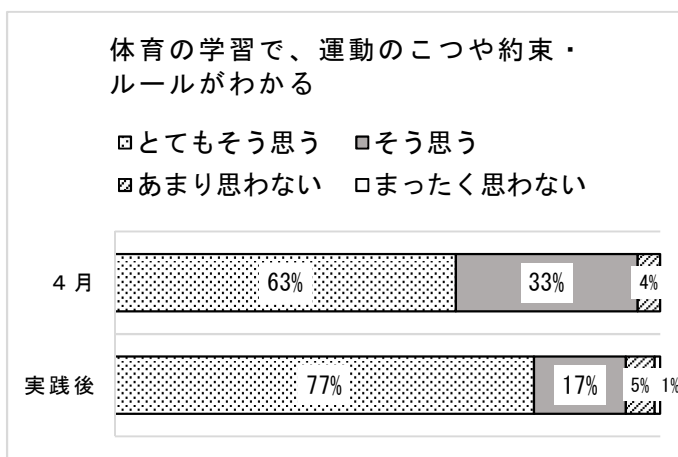
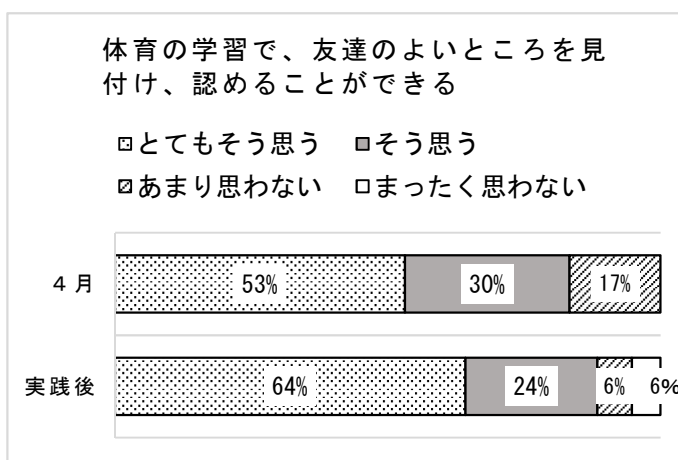
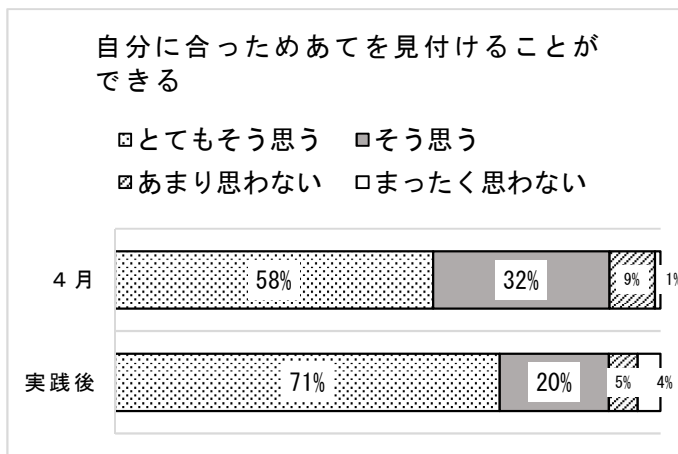
②意識調査より

体育科の学習で、「自分に合っためあてを見付けることができる」と答えた児童が4月と比べて増えている。毎時間のはじめに一人一人の課題を確認し、それぞれの課題に合った基礎となる動きの練習をすることができるような場を設定したことで、自分の課題が明確になっていったと考えられる。学習の合間にも、よりよく運動するために必要なことを振り返る時間を設け、練習する時間を確保した。また、学習カードから児童の課題を見取り、解決のための手立てを行うとともに、常に課題を意識して活動するよう声かけを行ってきた。そうすることで児童は、課題を意識して取り組んだり、次に何をしたいかを考えて学習したりすることができた。

「体育の学習で友達のよいところを見付け、認めることができる」に関しても肯定的な回答が増加した。仲間と自然に関わり合うことができるようなグループを意図的に組んだことで、考えの伝え合いが深まった結果と考えられる。技能や人間関係を考慮したグループ編成を行うことで、よかった点や改善点を示したり、自分の動きとの相違点を見付けたりして、仲間の考えを認めながら、思いを伝えることができた。これは、「そがっこの話し方・聞き方」を活用した伝え合いを日常的に行ってきたことによる成果も大きいと考えられる。

運動のこつや約束・ルールがわかる児童が増えている。3年生においては、様々な練習の場に掲示物を用意し、動きのこつを書いた色紙を、掲示物に貼ったり、直接書き込んだりすることを通して、幅跳びの基礎となる動きを身に付け、安全に活動することができたと考える。また、授業研究だけでなく、年間を通して学習のオリエンテーションを十分に行い、単元の評価計画を明確にして、毎時間丁寧に学習過程を進めてきた。そうすることで児童は、運動の行い方やルール、約束を身に付けることができた。

今後は、補充的支援として行ってきた評価規準に達しない児童への具体的な声かけなど、よりきめ細やかな手立てをさらに検討していきたい。



(3) ゲーム・ボール運動部会

①授業実践より

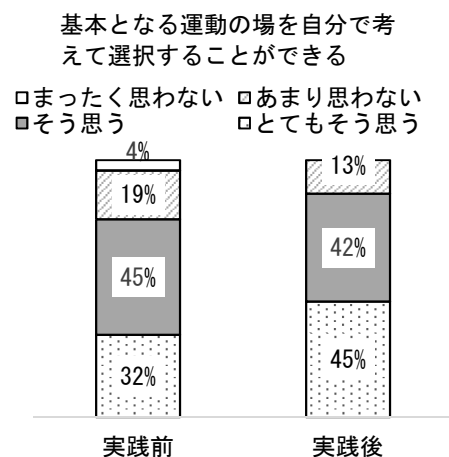
視点1 運動との関わり

○成果

- 基本となる運動では、様々な活動の場をつくったことで、ソフトバレーボールの行い方に関する技能を高めることができた。また、自分やチームの課題をしっかりと把握させた上で、それを解決するための活動の場を考えて選ばせたことで、主体的に学びに向かう力を高めることができた。

●課題

- 基本となる運動の場が多くあり、児童が使っていない場もあったので、学習を進めていく中で、学級全体で話し合いながら精選していく必要があった。



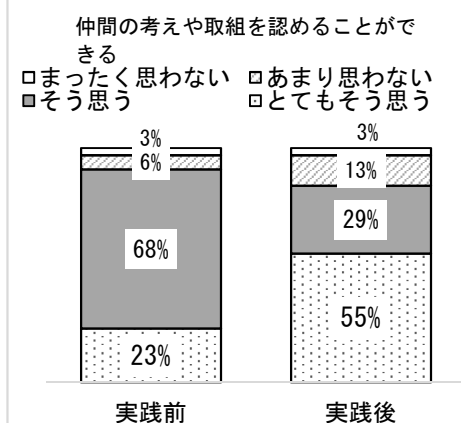
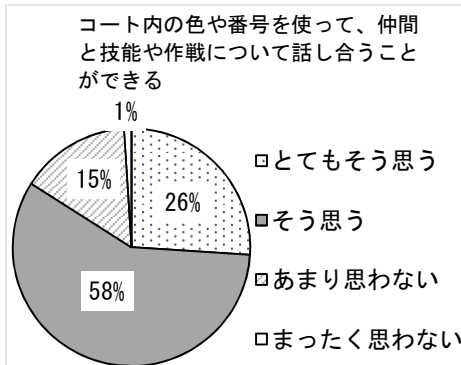
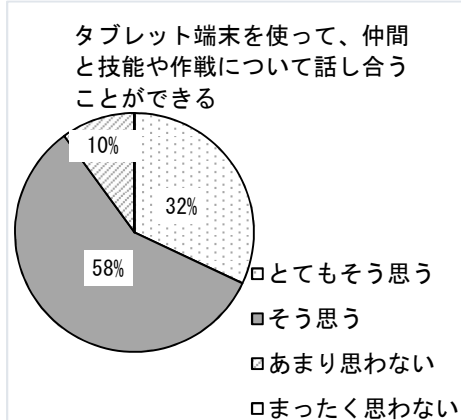
視点2 人との関わり

○成果

- タブレット端末の録画機能を用いて、ゲーム中の自分やチームの動きを確認することによって、明確な課題を捉えることができた。また、課題をもとにして、次のゲームに向けた具体的な作戦を立てることにもつながった。
- 作戦を立てる際に、コート内の色や番号を使って話合うことで、言葉だけではなく、視覚的にも課題や作戦をチーム全員で共通理解することにつながった。
- 評価シールを活用して仲間と考えや取組を認め合い、伝え合うことによって、自分やチームができるようになったことを認識することができた。また、仲間と評価シールを貼り合うことに楽しさや喜びを感じて、仲間のよいところをもっと見付けようとする意識を高めることにもつながった。

●課題

- タブレット端末を使って録画する児童を作戦リーダーとした。ゲーム中、作戦リーダーは録画することだけに注力していた様子が見られたので、ゲームをしている仲間にアドバイスや鼓舞する声を出しながら録画させる必要があった。
- チームによっては、作戦を立てるための話合いの中で、コート内の色や番号を使っていないところもあった。使わなければならないということにはしてはいなかったが、意識して使えるような声かけをする必要があった。
- 評価シールを貼り合うことに夢中になりすぎて、作戦を立てる時間がなくなってしまっていたチームがあった。作戦を立てる時間と評価シールを貼り合う時間とでしっかりと分けて時間を確保することで、活動もよりスムーズになると考える。



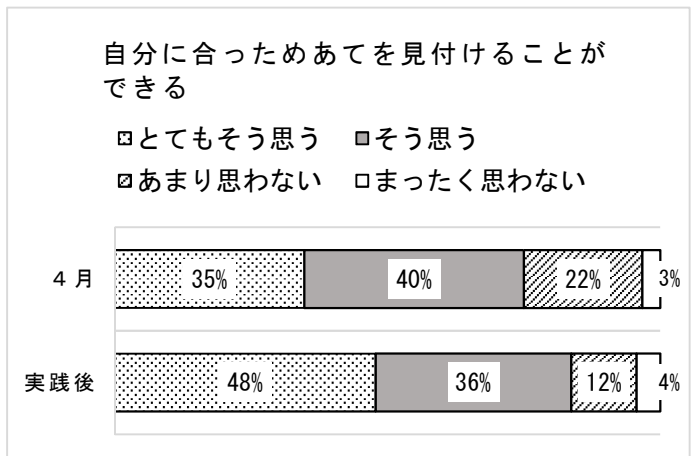
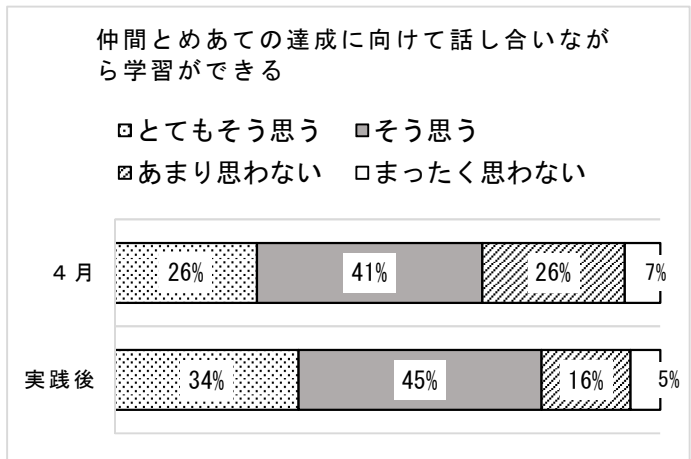
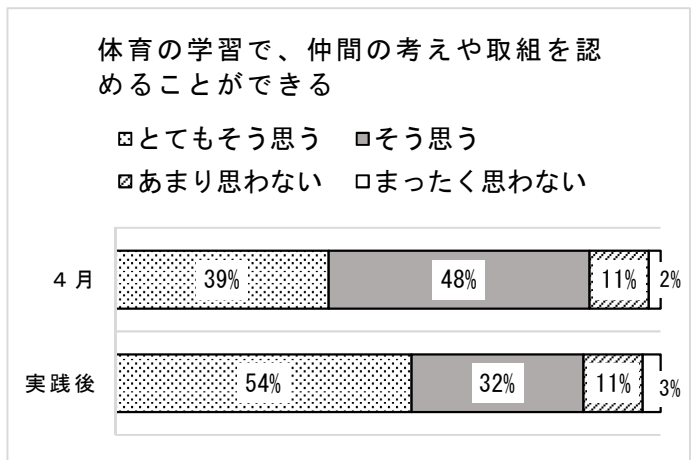
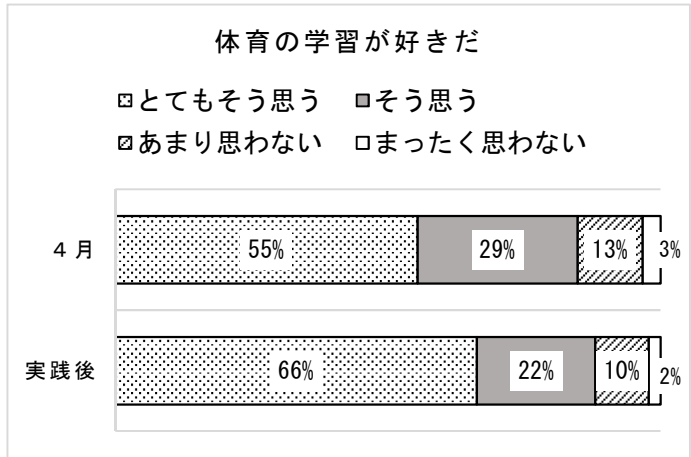
②意識調査より

「体育の学習が好きだ」と答えた児童が、実践後に増えている。これは、「基本となる運動」を重点的に行うことで技能が向上し、ソフトバレーボールを楽しむことができるようになった児童が増えたためである。これまで経験の少なかったネット型のボール運動を楽しむためには有効な手立てであったと言える。

「体育の学習で、仲間の考えや取組を認めることができる」に関しては、「とてもそう思う」と回答した児童が15ポイント増加した。これは、評価シールを活用したことで児童の自己有用感が高まったためであると考えられる。シールを貼り合うことで、「貢献」「承認」「感謝」の思いを可視化することができ、視覚的に実感することができた。

「仲間とめあての達成に向けて話し合いながら学習ができる」に関しても、4月と比べ、肯定的な回答が増加した。これは、タブレット端末を活用し、動画を見ながらチーム全体の課題を見付け、話し合うことができた成果である。

また、「自分に合っためあてを見付けることができる」と答えた児童も4月と比べて増えている。これは、チームの課題から自分自身の課題を見付け、練習の場を選ぶ過程で、主体的に課題を解決しようとする姿勢が身に付いたためである。授業実践を通して、仲間のよいところを認めたり、自己の行いを認めてもらえたりしたことによりよい人間関係を築き、チームスポーツの楽しさを味わうことができた。このような実践を積み重ねることで、生涯スポーツに親しむことのできる児童を育成していきたい。



2 2年間の取組から

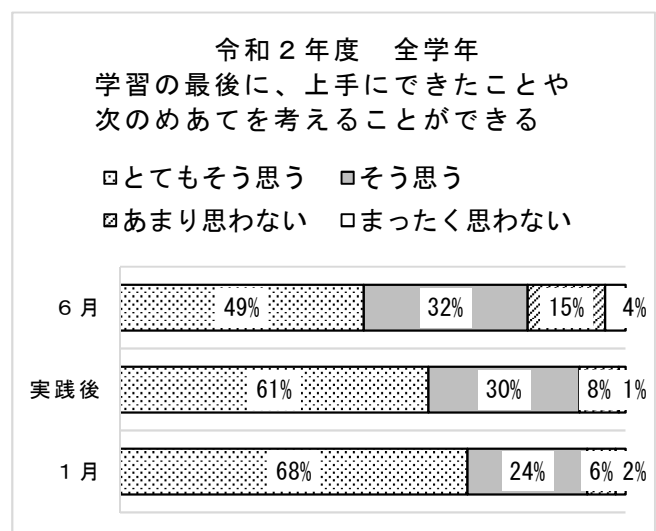
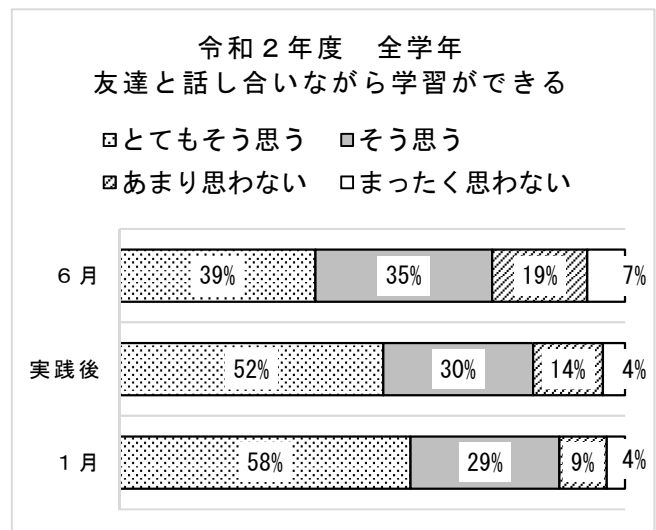
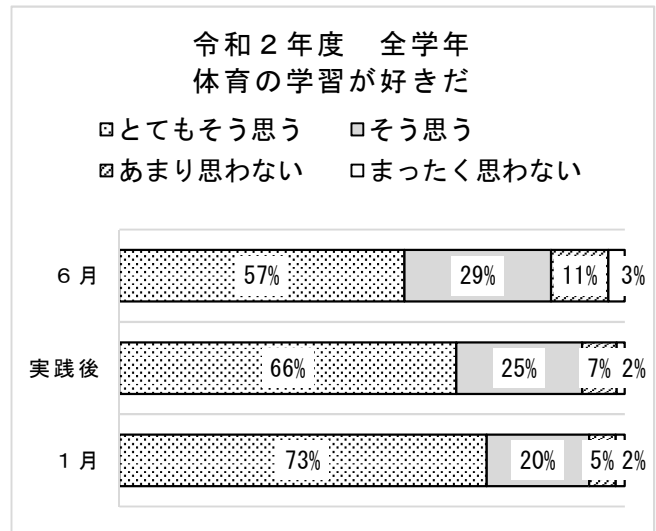
(1) 意識調査から

令和2年度には、「体育科アンケート」として、6月、授業研究後、1月の年間3回にわたり、8項目の意識調査を行った。「体育の学習が好きだ」の項目に関しては、年間を通して肯定的な意見が増えてきた。これは、各学年、各単元で運動との出会わせ方を工夫したり、学習過程を工夫したりしたことで、運動の特性を理解し、その楽しさを味わうことができたことが要因と考えられる。視点1の「運動との関わり」が年間を通して向上してきたのは、教師自身が運動の特性を理解し、適切な声かけなどを続けてきた成果である。

「友達と話し合いながら学習ができる」の項目に関しても、年間を通して肯定的な意見が増えた。コロナ禍にあっても、本校では視点2「人との関わり」を意識した取組を行ってきた。ICT機器を活用したり、掲示物を使用したりして、人と関わることを1年間取り組んできたことの流れである。関わりを意識する一方で、なぜ関わらせるのか、どこで、どのように関わらせるかといった視点が曖昧であった。ただ関わらせるのではなく、必要感のある関わりができるような手立てを考えていくことが課題である。

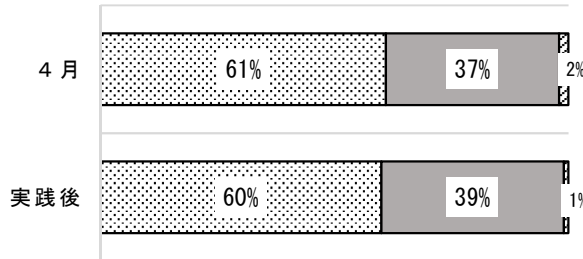
学習の振り返りの項目に関しても、年間を通して肯定的な意見が増えた。学習カードを工夫し、振り返りをしやすくしたり、毎時間視点を示して振り返りを行ってきたりしたことで、本時を振り返るとともに、次時への意識付けができたと考える。振り返りに関しても、なぜ、何のために振り返るのかを児童自身が意識できるようにしていくことが必要である。学習カードの取組を、今後も引き続き生かしていくことで、2年間の取組の成果と課題を考えていけるようにしたい。

令和2年度は、項目を8つに絞って意識調査を行ってきたが、評価の3観点に照らし合わせて考えた際に、「知識・技能」の観点の質問項目が足りないと考えた。指導と評価の一体化を図り、主題解明につながるよう、授業改善を図っていくため意識調査の項目を再考する必要があるため、令和3年度は意識調査の項目を改善した。知識を問う項目である「体育の学習で、運動のこつや約束・ルールがわかる」を追加し、9項目で意識調査を行うこととし、アンケート結果から実態を考察した。



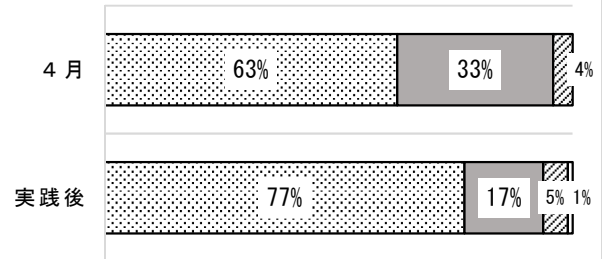
令和3年度 6年（器械運動部会）
 体育の学習で、運動のこつや約束・
 ルールがわかる

☐とてもそう思う ☐そう思う
 ☐あまり思わない ☐まったく思わない



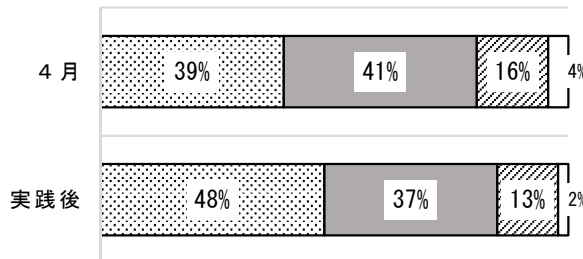
令和3年度 3年（陸上運動部会）
 体育の学習で、運動のこつや約束・
 ルールがわかる

☐とてもそう思う ☐そう思う
 ☐あまり思わない ☐まったく思わない



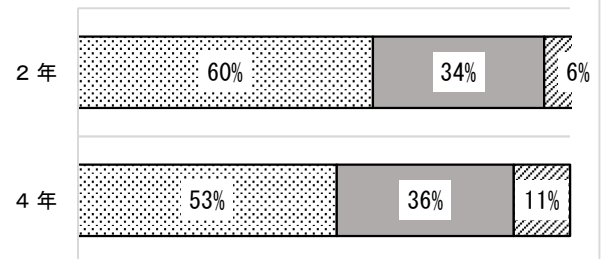
令和3年度 5年（ゲーム・ボール運動部会）
 体育の学習で、運動のこつや約束・
 ルールがわかる

☐とてもそう思う ☐そう思う
 ☐あまり思わない ☐まったく思わない



令和3年度 4月
 体育の学習で、運動のこつや約束・
 ルールがわかる

☐とてもそう思う ☐そう思う
 ☐あまり思わない ☐まったく思わない



夏季休業前に授業実践を行った学年に関しては、実践後の意識として、肯定的な意見が増加している。6年生に関しては、これまでの学習の積み重ねもあり、4月の時点で98%の児童が「とてもそう思う」「そう思う」と回答しているため、意識の変容があるとはいえないが、5年生では肯定的な意見が4月段階では80%だったのが、授業実践後には85%と5ポイント増加している。3年生に関しては、否定的な回答も5ポイントと増加しているが、「とてもそう思う」の伸びが14ポイントというように、学習でこつを意識して取り組んだり、約束やルールを守って活動することを繰り返し指導したりしていくことで、意識の変容が現れたと考える。陸上運動領域ということで、記録がはっきりするというのも知識の獲得につながる要因の一つであると考えられる。また、否定的な回答に関しても、3年生はこれまでの「遊び」から「運動」へと移行していく学年であり、「運動」のこつなどを意識して活動することの大切さについても同時に学んでいる段階であり、意識しているからこそ難しいと感じ、否定的な回答につながっているとも考える。このようなことから、発達の段階も考慮した上で効果的な手立てをとっていく必要があると言える。

2年生、4年生（1年生は4月は未実施）に関しては4月段階で肯定的な回答がそれぞれ94%、89%というように高い。これまでの学習の積み重ねから、遊びや運動を行う際に、こつを知ったり、行い方を理解したりすることの大切さに気付いていると考える。今までの取組の課題を生かして、全学年においてそれぞれの実態を考慮したで、学年の発達の段階に合わせて手立てを講じていくことで、知識・技能面においても向上を図れるように取り組んでいきたい。

(2) 年間の取組から

①そがっこチャレンジカード

運動の日常化を目指し、体育科の学習の時間以外も進んで運動に取り組む児童が増えるよう、「そがっこチャレンジカード」を作成した。1つの種目ができたらシールを配付し、カードを1枚全てクリアしたら認定証を渡すようにし、意欲的に取り組めるようにした。運動を楽しみながら取り組めるようにすることで、体育科の学習に対しても意欲的に取り組む児童が増えることを期待した。遊具遊びや、竹馬、一輪車、なわとび、ランニングなど様々な種目のカードを用意し、子供が休み時間に自由に取り組むことができるような内容を考えた。しかし、新型コロナウイルス感染予防のため、遊具遊び、竹馬、一輪車、ランニングのカードは日常的に行うことができなかつた。なわとびや遊具遊びについては、カードを配付したことで休み時間に意欲的に運動に取り組む児童の姿が見られた。今後も社会情勢に応じて、できる活動を行っていきけるように準備を進めていきたい。


なわとびチャレンジカード 中級コース (中学年向け)

年 組 名 前 _____

できる種目から星がちとつしよにどんどんチャレンジしてみよう。

シール	級	できたしゅもくの番号を書き入れよう
	10級	
	9級	
	8級	
	7級	
	6級	
	5級	
	4級	
	3級	
	2級	
	1級	
	金メダル	

どのしゅもくからやってもいいよ。できるものからチャレンジしよう。



中級コース しゅもくひょう

1 縄まわしとび 30回	2 縄まわしとび 40回	3 縄まわしとび 50回	4 縄まわしとび 30回	5 縄まわしとび 40回
6 そのほかけ足 30回	7 そのほかけ足 40回	8 そのほかけ足 20回	9 そのほかけ足 30回	10 そのほかけ足 40回
11 縄あやとび 20回	12 縄あやとび 25回	13 縄あやとび 15回	14 縄あやとび 20回	15 縄あやとび 25回
16 グーパーとび 20回	17 グーパーとび 25回	18 縄ふりとび 10回	19 縄ふりとび 15回	20 縄ふりとび 10回
21 縄ふりとび 20回	22 縄ふりとび 10回	23 縄ふりとび 10回	24 下まわしとび 10回	25 縄こうせとび 10回
26 縄こうせとび 15回	27 縄こうせとび 20回	28 縄こうせとび 25回	29 縄こうせとび 15回	30 縄こうせとび 20回
31 かけあしとび 20回	32 スキップとび 20回	33 縄ふりとび 10回	34 縄ふりとび 15回	35 縄ふりとび 20回
36 ペアあしあしとび 10回	37 ペアあしあしとび 10回	38 ペアあしあしとび 5回	39 ペアあしあしとび 5回	40 ペアあしあしとび 5回

【そがっこチャレンジカード】

②鉄棒週間

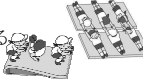

6月上旬に、中学年を対象に逆上がりの技能の習得や鉄棒運動に対する意欲の向上を目的に、「鉄棒週間」を行った。体育委員会の児童が中心となって、逆上がりが苦手な児童に補助を行ったり、アドバイスを送ったりしながら休み時間に活動を行った。多くの児童が意欲的に参加し、逆上がりを習得する児童が多く見られた。期間内に身に付けることができなかつた児童も、鉄棒週間後に自主的に鉄棒の練習を行っており、運動に対する意欲の向上を図ることができた。



【鉄棒週間の様子】

③「学習のねらいと学習活動例」の作成

学習指導要領の全面実施にあたり、体育科の年間指導計画の見直しをするとともに、全学年・全単元の学習のねらいを明確にし、主な学習活動例について共通理解を図るための資料を作成した。各領域において、6年間を見通した単元構成をし、各学年で何をねらって学習を行っていくかを整理した。実際に授業を行う際には、この資料で示されたねらいをもとに、学習過程や学習内容を各学年で具体的に考えてくようにしている。

学年	マットを使った運動遊び・マット運動	跳び箱を使った運動遊び・跳び箱運動
1年	<p>場や遊び方を選んだり、遊び方を工夫したりして楽しむ</p> <ul style="list-style-type: none"> 坂道マット、ジグザグに並べたマット、セーフティマットなどの場 転がったり体を腕で支えて歩いたりする動きで遊ぶ 	<p>場や遊び方を選んだり、遊び方を工夫したりして楽しむ</p> <ul style="list-style-type: none"> 跳び箱を2台つなげた場や、段差跳び箱のなどの場 またぎ乗り・下りや跳び乗り・跳び下りなどの動きをして遊ぶ
2年	<p>友達と一緒に遊び方を工夫して、いろいろな場で楽しむ</p> <ul style="list-style-type: none"> 坂道マット、ジグザグに並べたマット、セーフティマットなどの場 友達と合わせて回ったり、歩いたりする 遊び方を紹介し合う 	<p>友達と一緒に遊び方を工夫して、いろいろな場で楽しむ</p> <ul style="list-style-type: none"> 跳び箱を2台つなげた場や、段差跳び箱のなどの場 友達と合わせて回ったり、歩いたりする 遊び方を紹介し合う 

【学習のねらいと学習活動例】

④実技研修

令和2年度はコロナ禍での休校期間により、児童の体力が大きく低下すると考えられた。単元の導入では、1時間ごとにこれまで以上に工夫をして取り組む必要があり、また、体育科での活動にも大きく制限があったことから、できる活動について考えるとともに、児童同士の距離を適切に保つことも考えていくことが必須であった。そのため、年度初めに実技研修に取り組むことにした。

校長や体育主任、体育副主任が中心となり、実技研修に取り組んだ。第1回はボールを使って、一人でやることのできる活動について研修を行った。ボールは一人1個使用し、フラフープを使って自分の位置を決めるなど、距離を適切に保ちながらできるボール運動に取り組んだ。ここではボールを上に向けてキャッチをしたり様々な弾ませ方をしたりして、ボールに慣れる運動を行ったことで、ボール運動領域において取り組むことのできる「基本となる運動」について考えることができた。



【フラフープで位置を決めボール運動に取り組む】

第2回は陸上運動領域の、走り高跳びについて研修を行った。場や用具の使い方、その意図などについて考え、それらを使用して実際に取り組んだ。意図を知り、取り組んだことで、児童への声かけの仕方などについて考えることができた。



【場や用具の使用の意図について学び、実際に使用して取り組む】

その後は器械運動領域を中心に実技研修を進めていった。マット運動や跳び箱運動の実技研修では、「基本となる運動」として取り上げる動きを中心に、場づくりの仕方や、補助の位置や場所などについて取り組んでいった。

鉄棒運動では、体育館の鉄棒を整備し、屋内での活動もできることを確認するとともに、児童に身に付けさせたい動きについて実際に取り組むことで、指導のポイントについて考えることができた。体育科の研究では、教員自身が実際に体を動かすことで気付くことも多くあり、実技研修を行うことの重要性を再確認した。



【「基本となる運動」を中心に、台上前転の場づくりや開脚飛びの補助の仕方などに取り組む】



【身に付けさせたい動きを実際に取り組む】